令和２年度

第 67 回 全国国公立幼稚園･こども園教育研究協議会 和歌山大会

生き生きと遊び学ぶこどもたち ―未来へつなごう質の高い幼児教育を―

大会開催に向けてご準備いただきました貴重な発表資料を全国の皆様にお届けしたいと考え、国公幼ホームページに掲載させていただくことにいたしました。

～ 目 次 ～

あいさつ

「質」を支える「研修」を

全国国公立幼稚園・こども園長会　会長　箕 輪　恵 美　・・・　1

ご挨拶

和歌山大会実行委員長　松 本　幸 子　・・・　2

研究発表

園 経 営　**多様な体験を通して、主体的な幼児を育む幼稚園を目指して**

広 島 県　広島市立中筋幼稚園　園長　岩 本　弥 和　・・・　3

教育内容**「聴き合い、学び合う子どもの育成」を目指した小学校との連携の在り方を探る**

大 分 県　別府市立南立石幼稚園　教諭　井ノ口　千佳　・・・　6

教育課題　**思いを膨らませ、学びを育む**　～幼小中共通の課題から保育を考える～

愛 媛 県　大洲市立久米（くめ）幼稚園　園長　宮 部　香　・・・　9

分科会

第１分科会　**子育ての支援　親と子が共に育ち合う子育ての支援**

京 都 府　京都市立伏見南浜幼稚園　園長　村上　ちひろ　・・・１２

和歌山県　御坊市立湯川幼稚園　園長　上 山　弘 子　・・・１４

第２分科会　**学 び ・ 協 同　育ちと学びをつなぐ遊び**

滋 賀 県　長浜市立長浜幼稚園　前園長　曽我　百合子　・・・１６

和歌山県　和歌山市立宮前幼稚園　教諭　小出　紗有里　・・・１８

第３分科会　**教 育 課 程　質の高い幼児教育の実現に向けて**

奈 良 県　斑鳩町立斑鳩（いかるが）幼稚園　園長　北 吉　実 代　・・・２０

和歌山県　橋本市立紀見（きみ）幼稚園　教諭　髙 松　華 代　・・・２３

第４分科会　**幼 小 連 携　幼小の円滑な学びの接続**

兵 庫 県　相生市立平芝幼稚園　教諭　山 本　倫 子　・・・２５

和歌山県　新宮市立丹鶴（たんかく）幼稚園　主幹教諭　松尾　れいか　・・・２７

第５分科会　**特別支援教育　集団で育ち合う特別支援教育**

大 阪 府　富田林市立伏山台幼稚園　教諭　小門　知江子　・・・２９

和歌山県　海南市立巽（たつみ）幼稚園　主任　林田　麻実子　・・・３１

第６分科会　**園 経 営　次世代につなぐ園経営**

東 京 都　品川区立二葉幼稚園　園長　山 﨑　紀 子　・・・３３

和歌山県　田辺市立上秋津（かみあきづ）幼稚園　園長　阪本　佐和美　・・・３５

「質」を支える「研修」を

全国国公立幼稚園・こども園長会
会　長　　箕輪　恵美

清らかな水と神秘の森に恵まれた自然豊かな和歌山にて、８月２０日（木）・２１日（金）に開催される予定でした第６７回全国国公立幼稚園・こども園教育研究協議会和歌山大会は、「生き生きと遊び学ぶこどもたち　－未来へつなごう質の高い幼児教育を－」を主題とし、全国各地の国公立幼稚園・こども園の先生方をはじめ、幼児教育に関わる行政・大学等の関係各所の様々な立場の皆様が一同に会して学び合う貴重な機会になるはずでした。初日は絵本作家 長谷川義史先生による記念公演や３園の研究発表、ポスターセッションにおいて学びを深め、２日目は６つの分科会で基調提案を基に協議をし、その上で講師のご助言により学びを深める、という内容の濃い２日間が予定されていた本大会の開催を中止せざるを得なかったことは断腸の思いでした。コロナ禍で研修の機会が激減している中、大会開催に向けてご準備いただきました貴重な資料を参加予定の皆様だけでなく広く全国にお届けしたいと考え、このたび、国公幼ホームページに掲載させていただくことにいたしました。資料の掲載をご快諾くださいました先生方に心より感謝申し上げます。本資料を各園・各地域の研修にお役立ていただき、得られた学びを今後の実践に反映することで、大会の主題に迫る取り組みを全国各地で展開できれば幸いです。

幼児教育・保育の無償化という形で国が幼児教育の重要性を謳うようになった今、全国の国公立幼稚園・こども園に求められていることは、幼稚園教育要領及び幼保連携型認定こども園教育・保育要領に示されている内容をより深く理解し、各要領に基づいた質の高い教育を実践することで、各園が置かれている地域の幼児教育の核となる存在として力を発揮することです。実践の「質」を支える源は「研修」です。明日の保育にすぐに生かせる知識や技能から幼稚園・こども園として取り組むべき喫緊の課題、子どもたちの未来に関わる世の中の情勢まで、私たちが学ぶべきことは多岐に渡ります。そのような学びを通して専門性を高めると共に、一人の人として内面に磨きをかけることにも努め、質の高い教育にふさわしい、よりよい人的環境であることを目指してまいりましょう。

結びに、本大会の開催準備及び中止決定後のご対応について多大なご尽力をいただきました大会運営実行委員長　松本幸子先生をはじめ実行委員の皆様及び和歌山県公立幼稚園・こども園長会の皆様、ご指導ご支援をいただきました和歌山県並びに和歌山県教育委員会、和歌山市並びに和歌山市教育委員会をはじめとする関係の皆様方に深く感謝申し上げます。

ご挨拶

第６７回全国国公立幼稚園・こども園教育研究協議会

和歌山大会　実行委員長　松本　幸子

和歌山は常春の国、世界遺産の高野山・熊野古道をはじめ、和歌山城、白浜、和歌浦等、名所・旧跡、観光地の多い自然豊かで温暖な土地です。また、有田のミカン、かつらぎの柿、勝浦のマグロ、南部の梅干し等、全国的にも有名な産物がたくさんあります。令和２年８月、和歌山市において、「第６７回全国国公立幼稚園・こども園教育研究協議会和歌山大会」を開催させていただく予定でしたが、世界中で猛威を振るっている新型コロナウイルス感染症の影響により中止となってしまい、全国から皆様をお迎えすることができなくなり、残念でなりません。

和歌山大会では、「生き生きと　遊び学ぶ　こどもたち　～未来へつなごう質の高い幼児教育を～」という主題を掲げ、主体的に遊ぶ中で多くの経験を通して学ぶ子どもたちの教育について、全国の皆様と研究を深めていきたいと考えておりました。

幼稚園教育要領等では、３つの資質・能力の柱が示され、幼児教育の場には小・中・高等学校までつながる学びの基礎を培う役目が与えられています。中でも、国公立の幼稚園・こども園はこの教育の理念を忘れず、新しい時代を生きる子どもの育成を実現するための大切な役割を担っております。

本大会は中止となりましたが、国公立の幼児教育のすばらしさを全国に発信する機会となるよう、国公幼のホームページに３県の先生の研究発表と、６つの分科会の１２人の先生方の原稿を載せていただくこととなりました。

６月になり、園に子どもたちが登園できるようになりました。子どもたちは、明るい表情で久しぶりの友達との再会を喜んでいます。やはり、幼稚園・こども園は、元気な子どもたちの姿や笑い声があってこそ、生き生きとした幼児教育の活動の場となりうるのだと再認識いたしました。子どもたちの元気な声は、本当に宝物です。

最後になりますが、中止になりました本教育研究協議会の開催にあたりまして、ご指導・ご支援いただきました文部科学省、和歌山県、和歌山市、和歌山県教育委員会、和歌山市教育委員会をはじめ多くの関係者の方々、ご後援いただく予定でした各関係機関の方に感謝を申し上げます。

研究発表　園経営

多様な体験を通して、主体的な幼児を育む幼稚園を目指して

広島県　広島市立中筋幼稚園　園長　岩本　弥和

１　園の概要

本園は広島市の中心部から北部につながる国道５４号線と広島高速交通アストラムライン沿いに位置している。昭和５２年開園当時、園周辺には田畑が多かったが、交通網が整備されて利便性が良くなり、住宅地が増えマンションが立ち並ぶようになった。

学級編制は、４歳児１学級、５歳児２学級である。ここ近年、４学級が続いていたが、園児数は年々減少傾向である。職員は、園長、クラス担任、担任外教師、障害児加配教師、臨時事務員、特別支援教育アシスタントで構成されている。

保護者は、幼稚園の教育に協力的で、「保護者の会」の活動が活発である。近隣には、小学校２校、私立の幼稚園、保育園、公立保育園があり、保幼小連携を密にして、カリキュラムをつなぐなどの接続を行っている。

２　主題設定の理由

幼稚園教育要領では、幼児期の教育は、「環境を通して行う教育」を基本とすると述べられている。

幼児は、環境に興味や関心をもち、試したり工夫したりしながら、様々な力を獲得する。そしてさらにやってみたい、知りたい、分かりたいという意欲をもち、その喜びを表情や言葉で表現し、伝え合う楽しさを味わっていく。

幼児の興味、関心は様々であることから、幼稚園では、思わず関わってみたくなるような環境を構成し、幼児が自ら遊びを選び取り、豊かな体験ができるようにすることが大切である。そして、教師や友達と関わることで、幼児の主体的な活動がより充実したものになるよう援助していくことが必要である。

本園の４歳児は、素直でいろいろなことに興味をもつ幼児が多いが、母親との分離不安のある幼児や、友達に関わることが難しい幼児も見られる。５歳児は、自分の思いを強くもち、言葉で表現する姿が多く見られる。しかし、思いの食い違いがあると、気持ちに折り合いを付けることができず、遊びをすぐにやめる姿も見られる。

そこで、身近な人と関わりながら多様な体験を楽しみ、自分で考えたり、生活に取り入れたりし、友達と一緒に遊びを創ることのできる主体的な幼児を育成していきたいと考え本主題を設定した。

３　研究のねらい

多様な体験ができる環境を通して、幼児一人一人が興味、関心をもって主体的に遊び、教師や友達と関わりながら、充実感や達成感を味わうことができるようにする。

４　研究の内容と方法

（１）　園庭環境を見直し、充実を図る。
（ミニビオトープ、花壇作り、果樹の収穫、小動物の飼育等）

（２）　協同的な活動を計画的に取り入れる。
（お店ごっこ、ハロウィンごっこ、発表ごっこ等）

（３）　園内研修の充実を図る。（ミーティング）

５　実践事例

（１）「ミニビオトープ作り」

幼児が自ら探索し、いろいろな発見を楽しむことのできる自然環境を目指し、玄関脇の活用していないスペースにミニビオトープを作り、メダカを入れた。幼児が、虫や草花、小動物や鳥と出合い、関わって遊ぶことを願い、環境を構成した。

１０月、４歳児 A 児が小さな虫を見付けて見せてくれた。

A 児：これ、あそこで見付けた。

教師：ヤゴかな？ヤゴだったら、水の中の方がいいけど。

それを聞いていた B 児が、A 児の手のひらからさっとヤゴを取って、走って池へと向かった。A 児は、慌てて追いかけたが、B 児は、池にヤゴを投げ入れてしまった。けんかになるかもしれないと思い、見守っていたが、A 児は、怒るどころか、池の底を歩くヤゴを見続け、片付けの時間になっても離れなかった。

その日の午後、教師が図鑑を持ってきたこ

とで、ヤゴはトンボになることを知る。教師が「何トンボになるんかね」「何食べるかね」と問い掛けて、一緒に調べると、メダカを食べるということが分かった。そこで、ヤゴを別の池に移すことになった。餌になるミミズを探すことも決定した。それを聞いていたＣ児が「探してくる」と言い、スコップを持って友達と一緒に畑を掘り始めた。

ところが、とうとうヤゴを見失ってしまった。Ａ児は、降園時も、翌日も池のそばで探していた。すると、友達も一緒に探し始める。

Ｄ児：なになに？
Ｃ児：ヤゴが逃げた。
Ｅ児：え？ヤギ？
Ｆ児：ちがうよ！「やーご」

数日探したが、結局ヤゴは見付からなかった。

省察

入園後２か月、４歳児は、花壇でのダンゴ虫探しに没頭し、友達と一緒に遊ぶことを楽しむようになってきた。２学期に、「ミニビオトープ」という環境を整備したことで、メダカやヤゴと出合い、興味や疑問がわき、先生や友達との伝え合いが生まれた。自然はそこにあるだけで幼児を引き付けるが、教師の言葉掛けや友達の様々な関わりが加わったことで、さらに主体的な活動につながっていったと考える。

（２）「発表ごっこをしよう」（５歳児２月）

１２月には生活発表会で、劇遊びや合奏を発表する。そして、２月の参観日には、自分たちで紹介したい遊びを子どもたちが相談しながらグループで発表することになった。

女児７名の「マジ魔女ピアーズ」のグループもその一つである。これまで、キャラクターになりきって、ポーズを決めて遊んでいた。そこに、新しいメンバーが加わって発表することになった。

１日目　発表ごっこのプログラム決定
２日目　グループで話し合い

どの役をするのか、衣装の色を相談する。「何色にする？」「色がかぶらんようにしようや」「私は・・・」と、随分長い時間か掛かって役決めをした。ようやく決まると、歓声をあげて、教師に報告するために走り出した。

３日目

メンバーの中には、キャラクターを知っているが、他の幼児のように動くことが難しいＧ児もいた。タイミングよく登場できなかったり、セリフを言えなかったりした。すると、キャラクターへの思い入れの強い幼児のアドバイスが始まった。

４日目

Ｈ児：Ｇちゃんには、ネコミミがあるといい。
　　家にあるから持ってくるよ。
Ｉ児：Ｇ子ちゃんには、（ちゃんと）出番や言葉を
　　覚えてほしい。

Ｇ児は黙っている。服を触ってばかりで、自分の動きについて言われていることに気付いていない。教師は、Ｇ児にＨ児の話を聞くよう促す。

Ｉ児：ポーズを増やしたい。（やってみながら）
Ｊ児：それは、走ってるみたいだからいやだ。
Ｇ児：やってもいいよ。
Ｋ児：いやだ。

意見は半分に分かれた。自分の意見に賛成してくれないことに苛立ち、Ｉ児が泣き始める。

教師：明日のリハーサルはどうする？
Ｊ児：明日やってから考えよう。
Ｍ児：明日はやってみる。
Ｋ児：でも、それ（ポーズ）はいらないと思う。

結局、翌日やることに決まったが、Ｉ児はグループが解散してもまだ泣いていた。教師は気持ちに共感しながら声を掛け、二人きりで話す。

教師：Ｉちゃんが意見を言ったから、みんなも意
　　見を言えた。でも、Ｉちゃんの意見が全部通

るわけじゃないよね。（発表ごっこは）Ｉちゃん一人で頑張るんだっけ？
Ｉ児：（首を横に振る）
教師：みんなで頑張るんだよね？
Ｉ児：（うなずく）
　翌日のリハーサルでは、Ｇ児はステージ上で一生懸命に役割を演じ、Ｉ児は自分の意見は通らなかったが、笑顔で頑張り、Ｇ児にささやいて教える姿が見られた。

省察

　言葉で自分の思いを伝えることや、相手の思いを受け入れ、自分たちのグループ発表に向けて取り組んでいくこと、意見のぶつかり合いや、うまくできないことへの葛藤などを体験した。そして、やり遂げた後の達成感も感じることができた。子どもたちに任せているからこそ、子どもたちは主体的に意見を出し合い、これまでの経験を生かして見通しをもって話し合うことができた。教師の助言は大切な援助であるが、就学前のこの時期には、見守りながら一緒に考えるという姿勢でいることが、他の幼児の意見を引き出し、さらに主体的な活動になった。

（３）「ミーティング」
　４年前から実践している「ミーティング」は月に２回実施し、幼児理解と教師の援助について研究を進め、教師の資質向上を図っている。
　留意点は次の通りである。

「ミーティング」では・・・
○ 教職員で多角的に幼児を見取り、互いの意見を肯定的に受け止める。
○ ミーティング記録用紙の様式を工夫し、園目標や研究主題、ねらいなどに沿って幼児の様子や教師の援助を記録する。
○ タイトルをつけることにより、伝えたい内容をより明確化させる。
○ ３分間で事例をまとめて話し、幼児の見取り方、教師の援助、そして評価について端的に伝える。

タイトル「こうやってやるんだよ」
　４歳児は登り棒が人気。Ｍ児とＮ児はとても上手です。私が「どうやってやるんかね？」と言うと、Ｍ児「手を上にあげて、空にあがるんよ」Ｎ児「足をピタッとするんよ」と言って、言葉で伝え合いができていました。
　（４歳児担任より）

６　研究の成果と課題

○　園庭環境を見直し、新たにビオトープや花壇を作ったりしたことで、幼児は直接体験を積み重ね、多くの発見や学びが生まれた。しかし、自然環境は思い通りにはいかないことが多い。いつ、どのように保育に生かすのか迷っているうちに時期を逃すことも多かった。職員が協力して環境整備を行い、見通しをもって保育に生かすことが大切である。自然環境の充実は、幼児一人一人の興味、関心を広げ、多くの学びを生む。その体験は幼児期の原風景となり、その後の幼児の成長にとって重要な体験となる。より豊かな環境となるよう工夫していきたい。

○　協同的な活動、特にごっこ遊びは、学期に１回、５歳児の学年合同で取り組んだ活動である。３学期の「発表ごっこ」は、幼児の発想を引き出し、多様な体験ができる活動となった。幼児が実現したいということを大切にして、友達との折り合いをどのようにつけていくのか、教師が連携しながら援助した。園長は、教師の見取りを受け止め、共感したり、援助方法について助言したりして支えた。幼児は、遊びの楽しさ、葛藤を味わいながら、明日の活動への期待をもって主体的に遊びに関わるようになった。

○　「ミーティング」の取組では、幼児理解を深めるとともに、互いの保育観を知り、園の目指す主題について考えることができた。短い時間で話すことで、自身の保育を振り返って評価する力が付き、教師の質の向上につながった。園長として、幼稚園教育要領に示される内容や幼児期の終わりまでに育ってほしい姿に照らし合わせながら助言し、次に生かすようにした。今後も幼児のまなざしの先にあるものを共に見つめ、主体性を育む援助について語り合える幼稚園を目指していきたい。

研究発表　教育内容

「聴き合い、学び合う子どもの育成」を目指した小学校との連携の在り方を探る

大分県　別府市立南立石幼稚園　教諭　井ノ口　千佳

１　園の概要

本園は、別府市中心部からやや離れた高台に位置し、鶴見山を目前に仰ぎ、自然公園が隣接している。園庭からは湯けむりが臨め、自然や地域の文化に恵まれた環境にある。別府市には公立幼稚園が１４園あり、５歳児１年保育で、すべての幼稚園が小学校と併設（内１園は３年混合保育で、小・中学校に併設）しており、どの園も園児と児童、職員間での連携が取れやすい環境にある。本園も、園児が小学校の行事に参加したり、１年生・５年生とは年間計画に位置付けた交流をしたり、幼小職員で就学前後に子どもについての情報交換を行うなどの連携を図っている。卒園後はほぼ全員が併設する小学校へと進学する。

２　主題設定の理由

幼稚園教育要領、小学校学習指導要領の改訂により、ますます幼稚園と小学校とが教育内容や指導方法について相互理解することが大切になってきた。

幼児期から児童期への発達の流れを共有する手掛かりとして「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（以下「１０の姿」）」が示された。幼稚園での育ちを「１０の姿」を視点に捉え、その後の小学校生活へとどのようにつながっていくのか考えることで相互理解を深めていきたいと考えた。

そこで、本園の特徴と子どもの実態から、併設の南立石小学校も目指している『聴き合い、学び合う子どもの育成』を目指すこととした。「１０の姿」を視点に『聴き合う』中で子どもにどのような『学び』があるのか、さらに、幼稚園と小学校とが相互理解を深めるためにはどのような工夫が必要かを明らかにしたいと考え、このテーマを設定した。

３　研究のねらい

（１）「１０の姿」を視点に『聴き合う』中で、子どもにどのような『学び』があるのか明らかにする。

（２）幼稚園と小学校とが相互理解を深めるための工夫について明らかにする。

４　研究の内容と方法

（１）『聴き合い、学び合う』姿と捉えた場面の記録から、「１０の姿」を視点に子どもの学びや環境構成・援助について考察する。

（２）相互理解を深めるために小学校との連携活動、保育・授業参観、合同研修会等を計画・実践し、「１０の姿」の活用を試みる。

５　実践事例

（１）『聴き合い、学び合う』姿と捉えた場面の記録から、「１０の姿」を視点に子どもの学びや環境構成・援助について考察する。

研究を進めるにあたり、抽出児Ａ児の幼稚園Ｉ期から入学後までの育ちの見通しをもち、取り組んでいった。

	全体	『聴き合い、学び合う』姿につながるＡ児への願い
Ⅰ期 入園～ ５月中旬	親しみ 安定	教師には安心して思いを伝えたり話を聴いてみたりしながら、自分がやりたいことに取り組もうとする。
Ⅱ期 ５月下旬 ～７月	個の充実 園生活の 楽しさ	友達にも安心して思いを出したり教師を介して友達の思いを聴いてみたりしながら、友達にも思いがあることを知る。 友達の思いや考えも少しずつ受け入れたり取り入れたりしながら、自分なりに試したり工夫したりして遊ぼうとする。
Ⅲ期 ９月～ １０月	力を合わせる楽しさ	友達と思いを伝え合いながら遊びをより楽しくするために関わろうとする。
Ⅳ期 １１月～ １２月	友達関係の深まり 園生活をつくりだす楽しさ	友達とイメージや考えを聴き合いながら、一緒に遊びを進める楽しさを感じる。
Ⅴ期 １月～ 卒園	達成感 充実感 自信	共通の目的に向かって、友達と思いを聴き合い、受け入れ合いながら、一緒に遊びを進める満足感や達成感を味わう。

⇩ 小学校の先生と話し合い、幼稚園から小学校の学びを見据えておく。

入学後 １学期 前半 (スタートカリキュラムの時期)	１年生の 自覚 安定	友達の話を興味をもって聴きながら、自分と友達の考えの共通点や違いに気付き、自分なりに考えを深めようとする。

Ⅰ期　入園～５月中旬

・園生活に親しみをもち、安定していく時期

＜この頃のＡ児への願い＞

・教師には安心して思いを伝えたり話を聴いてみたりしながら、自分がやりたいことに取り組もうとする。

事例①　４月２２日「ここにあった…」

入園して約１週間、幼稚園では、家庭や保育園で経験している遊びの場や子どもが興味をもちそうな遊びの場を用意し、子どもたちが興味をもち、遊びに取り組めるようにした。A児はままごとコーナーがお気に入りで、この日もままごとコーナーに行き、お皿に①次々とごちそうを入れたり、包丁で野菜を切ったりすることを繰り返し楽しんでいたが、同じ場にいるY児との間でトラブルになる。ままごとのトングを「とらんで」と言うY児と「ぼくが使いよったんで」と言うA児。A児はしばらく自分で持ってきたと言い続けていたが、教師が間に入りながら話を聴いていると、④A児は「ここ（R児が遊んでいるところ）にあった…」と本当のことを伝える。教師は本当のことを言えたことを十分に認め、友達が使っている時にはどうすればいいか尋ねると、A児は⑨「貸してって言う」と答える。A児はY児に「貸して」と言い、Y児は「いいよ」とA児にトングを渡す。Y児の優しさを認め、A児に「よかったね。ちゃんと貸してって言ったら貸してくれたね」と言うと、⑨微笑みながら「うん」と答える。A児はY児に「ありがとう」と言い、トングで料理をつかみ、並べて遊び始めた。

＜事例から「１０の姿」を視点に子どもの学びや環境構成・援助について考察する＞

①『健康な心と体』の視点から

園生活に安心感をもち、自分のやりたいことに繰り返し取り組む。

④『道徳性・規範意識の芽生え』の視点から

初めは事実でないことを伝えることが、教師の関わりで、次第に正直に言ってみようとする。

⑨『言葉による伝え合い』の視点から

友達と関わるための言葉の伝え方を考え、友達と関わる心地よさを感じる。

学びにつながった環境構成・援助

・子どもたちが興味をもち、やってみたいと思える遊びの環境。

・子ども同士での話し合いが難しい入園当初は、教師が間に入りながら事実を確認したり、互いの思いを伝えられるよう橋渡しをしたりする。

・「貸して」と言ったことで友達とより良い関わりができたことを実感できるよう声を掛ける。

このように、Ⅱ期以降も記録から、「１０の姿」を視点に子どもの学びや環境構成・援助について考察していった。

（２）相互理解を深めるために小学校との連携活動、保育・授業参観、合同研修会等を計画・実践し、「１０の姿」の活用を試みる。

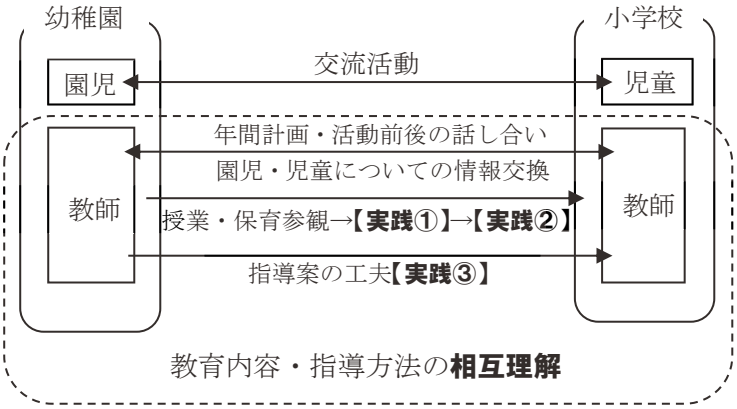
年間を通して、１年生・５年生との交流活動を計画している。１年生・５年生教員と年間計画を立てる際、「幼稚園と小学校との接続を意識し、目的をもって交流活動ができるようにすること」「交流の中で、教師間でも互いの教育内容や指導方法について相互理解をすること」「活動前後には話し合いをもち、交流活動がよりよいものになるよう、見直していくこと」などを共通理解した。

＜幼稚園と小学校の接続を意識した連携活動の目的＞

（太字：今年度特に意識した部分）

	園児	児童
１年生	・１年生の活動を目にすることで、入学への期待をもつ。	・幼稚園児と一緒に活動することで、小学生になったという自覚をもつ。
５年生	・仲良しの小学生がいることで、小学校を身近に感じるようになる。	・園児が来年度１年生になったときに、スムーズにお世話ができるよう、5年生の時点で仲良くなったり、**１年間通して園児の成長を知り、入学した時の１年生への関わり方を考えたりすることができる。**
教師間	**・互いの教育内容、指導方法について相互理解を深める。** **・教育課程を見直し、連携活動の充実をはかる。**	

＜連携計画・実践の概要＞



【実践①】　～小学校教育を理解するために～

小学校の参観日に幼稚園教員が１年生の授業を参観した。参観後、園内で「１０の姿」を視点に児童の学びや学びにつながった指導方法について考察し、幼稚園ではどのような学び、環境構成・援助が必要かを考えていった。

【実践②】　～相互理解につなげるために～

小学校の授業参観後に幼稚園で取り入れていこうと話し合った事を意識しながら幼稚園でもアサガオの実践を行い、「１０の姿」を視点に子どもの学びや環境構成・援助について考察した。

＜実践①②より分かったこと＞

活動「アサガオの種植え」

		幼稚園	小学校
ねらい		アサガオの種や花、成長する様子のおもしろさを知ることで興味をもち、成長を楽しみにしながら種を植えようとする。	栽培への意欲を高めるとともに、種を観察して特徴をつかみ、種や種まきの様子を絵や文、言葉等で表現することができるようにする。
指導方法	相違点	絵本による活動の意欲付け 友達と道具の貸し借りができる環境	意見交流の場 名前カードなどを活用し、子どもの意見を分かりやすく板書 観察カード
	共通点	思いや気付きに共感する その子なりの表現を認める	
取り入れたい指導方法		意見交流の場	活動への意欲付け

互いに育てたいところはしっかりともっておきながら、良いところや歩み寄れるところは取り入れていくことで幼小の段差を滑らかにし、接続の推進を図ることにつながると考える。

【実践③】　～小学校の先生に伝わりやすい指導案の工夫～

以前の指導案

＜良い点＞
・一人一人の育ちを細かく予想し、援助を考えることができる。

＜課題＞
・その活動を通して「１０の姿」のどこが育つのかが見えにくい。
・細かく読まなければ教師の願いや関わりが見えづらい。

⇩　「１０の姿」をより意識できるように

＜改善のポイント＞
・その活動を通して「１０の姿」のどこが育つのか一目で分かりやすくした。
・子どもの姿と環境構成・援助を対応させ、教師の関わりにより願う育ちを見えやすくした。

幼稚園教員の感想
・この遊びを通して育つであろう「１０の姿」を書いておくことで、子どもの姿と育ちを意識しやすい。
・子どもの姿に対しての援助を対応させて書くことで、育てたい子どもの姿に対する援助をより意識できる。

小学校教員の感想
・この遊びを通して何が育っているのか分かりやすい。
・幼稚園で何を願い、教師がどう動いているのか見える。
・実際に保育を見に行く時間を取りづらいが、指導案を見ても幼稚園で何を学んでいるのか分かりやすい。

６．研究の○成果と▲課題

○「１０の姿」を視点に子どもを捉えていくことで、今の子どもの学びや今後願う学びを整理しやすかった。また、どの方向の学びを願うかで声掛けの仕方などを意識することができた。

○目指す子ども像を幼・小で共通の視点とし、小学校教員と連携を図りながら、幼稚園のⅠ期からⅤ期、入学後の願う姿まで見通したり、１年生の授業を参観し、幼稚園との共通点や相違点について考察したりしたことで、幼稚園で必要な学びや環境構成・援助を見通しをもって考えることができた。互いに育てたいところはしっかりともっておきながら、良いところや歩み寄れるところは取り入れていくことで、幼小の段差を滑らかにし、接続の推進を図ることにつながると考える。

▲小学校との連携を進めるにあたり、幼稚園と小学校の接続を意識した目的を小学校教員と共通理解することができた。また、交流活動が互いの教育課程に位置付いていることで、スムーズに連携を図ることができている。年間のねらいをもとに、それぞれの時期や活動ごとのねらいの見通しをもち、よりよい連携、接続へとつなげていく必要がある。

▲「１０の姿」を意識した指導案の作成を試みたことで、小学校教員にも幼稚園での学びが伝わりやすくなったのではないかと考える。今後、より多くの小学校教員に保育参観をしてもらったり、共に研修の場をもったりすることで、幼稚園教育のさらなる理解につなげるとともに、「１０の姿」を視点とした子どもの捉え方について小学校教員とも共通理解していく必要がある。

研究発表　教育課題

思いを膨らませ、学びを育む

～幼小中共通の課題から保育を考える～

愛媛県　大洲市立久米（くめ）幼稚園　園長　宮部　香

１　園の概要

前年度、勤務していた平野幼稚園は、大洲市平野町に位置し、少子化や共働き世帯の増加などにより、就園率が低下し、４・５歳児混合クラス１学級という極小規模園である。

同一敷地内に、小中一貫教育を行っている小学校と中学校があり、合同行事や合同研修などを行っている。また、近隣には公民館があり、地域が一体となった活動を行い、健全育成の風土がある。

平野の教育を語る際には、「いころ」という言葉が使われる。この「いころ」とは、「いこる」（火がおこる）ことを名詞化したもので、燃え盛る火のような強い意志、力、元気、やる気のことを示しており、幼稚園・小・中学校、地域が協力して、「いころの子を育てる教育」に取り組んでいる。

２　主題設定の理由

本園では、幼稚園から中学校までの１１年間を連続した期間と捉え、小・中学校と共に、「発達の特性に応じた連続性のある教育を行うとともに、教職員や幼児児童生徒が連携、交流を深めることにより、幼稚園・小学校・中学校が家庭・地域と協力して、一丸となって子どもたちを育てる」という経営の基本方針を掲げている。

このことを踏まえ、幼小中の教職員にアンケートを行った結果、「幼稚園から中学校まで、安定した友達関係の中で過ごすため、つながりを深めることができる」反面、「固定化された人間関係の中で過ごすため、新たな環境に対応することができにくい」ということが、共通の課題であると捉えることができた。このことは、学校評価委員会の意見としても挙がったことがある。

また、アンケート結果では、この課題解決に向けて、いろいろな人との関わりを通して、生き生きと表現する力を育てることが必要であるとの意見も出される。

そこで、この共通の課題解決に向けて、その時々の幼児の思い（心情）を膨らませ（意欲）、学び（態度）を育んでいきたいと考えた。また、課題解決につながる取り組みによって、「いころの子」を育てたいという教師自身の思いを膨らませ、学びを得たいと考え、本主題を設定した。

３　研究の仮説

（１）　幼小中の教育実践を共有することで、連続性を踏まえながら、表現する力を育むことができるだろう。

（２）　いろいろな人と思いを通い合わせる体験をすることで、自分の思いが伝わる喜びを味わうことができ、「いころの子」を育むことができるだろう。

（３）　友達と同じ目的を持って、思いや考えを伝え合いながら遊ぶことで、様々な表現が生まれ、豊かな表現力を育むことができるだろう。

４　研究の内容と方法

（１）教師の思いを学びにつなげる研修

幼小中で研究授業・保育を行い、連続性を踏まえながら、表現する力を育むための支援を探る。

（２）幼児の思いを学びにつなげる幼小中の連携

幼児が、主体的に活動を進めることができる交流活動を工夫する。

（３）幼児の思いを学びにつなげる人との関わり

他園と交流する場を作り、幼児が、自分の思いを出しながら対話ができる関わりを行う。

（４）幼児の思いを学びにつなげる表現遊び

安心して表現できる環境を作り、幼児一人一人の良さを生かす関わりを行う。

５　実践事例

（１）教師の思いを学びにつなげる研修

小学校では各学年の国語科の授業、中学校では各教科の研究授業に参加する。

授業は、少人数のグループで考えを出し合い、意見をまとめ、全体での発表を行い、答えを導き出すという流れで行われる。また、友達の発表に対して、良いところを認め合う場面もある。

研究協議では、「おおずの授業スタンダードの支援の視点と具体的な手立て」のチェックリストをもとに意見交換を行う。

幼稚園の研究保育では、小・中学校の教師も保育に参加する。

研究協議では、幼稚園と小・中学校教育の違い、ねらい達成に向けての環境構成や教師の関わり方などについて意見交換を行う。

考察

研究授業では、小・中学校の教師が、児童生徒の考えに対して、友達同士が肯定的に捉えたり、良いところを認めたりする雰囲気をつくったり、話し合いが進めやすいグループ作りに配慮したりしていた。そのことにより、児童生徒一人一人が、自分の考えを安心して出すことができていたと考える。

児童生徒は、自分の考えを言葉だけで伝えにくいときには、分かりやすく伝えるため、絵を描いたり、身振り手振りをしたりして伝えていた。このことから、幼稚園での人との関わり方や様々な表現遊びにおける学びが、小・中学校での表現する力にもつながっていると考える。

研究保育では、小・中学校の教師が、幼児の表現する姿を目にし、発達の姿や特性について知る機会となったと思われる。また、ねらいの達成に向けての教師の関わり方から、幼稚園教育と小・中学校教育の違いを感じることができたと考える。

（2） **幼児の思いを学びにつなげる幼小中の連携**

ＡＬＴの先生に、学芸会で行ったハンドベル演奏を見ていただき、教師が、「先生に見ていただいて良かったね」と声を掛ける。

すると、A児が、「小学生や中学生にも、学芸会を見てもらいたい」と言う。教師が、「みんなにも、そのことを言ってみたらどうかな」と答えると、A児は、クラス全員に声を掛け、みんなが賛成する。

そこで、みんなで話し合いをし、２チームに分かれて、小・中学校の校長先生にお願いに行く。

小・中学校に行くときに、「どきどきする」と言うＢ児に、C児が、「一人じゃないけん大丈夫よ」と声を掛ける。

中学校の校長先生に、「勉強の時間はできないから、給食を食べながら教室でするのはどうですか」と提案してもらう。また、幼児がプログラムを見せながら、「何が見たいですか」と尋ねると、校長先生から「ダンスはステージがいるから、給食を食べながら見ることができるのはどれかな」と聞かれ、「それなら、ハンドベルです」と返事をする。小学校でも、給食の時間にハンドベル演奏をすることになる。

その後、日程調整を行い、披露する日までに、幼児は、始めや終わりに言う言葉や衣装を決めたり、演奏の練習をしたりする。

初日は、まず、小学校職員室で行い、その後、各教室を回る。各教室への移動の際に、「どきどきする」と言う友達に、「みんながおるけん、大丈夫よ」と声を掛け合う。

どの場でも、披露後には、小・中学生や先生方にたくさんの拍手をいただき、幼児から、「喜んでもらってうれしかった」「どきどきしたけど楽しかった」などの感想が聞かれる。

考察

教職員アンケートで、幼児が主となる交流活動を考えてはどうかという意見があり、A児の発言を生かそうと思い、言葉を掛けた。学芸会後、保護者や地域の方など、たくさんの人にほめてもらったことで、幼児は充実感を味わい、自信をもつことができていたため、小・中学校でも見てもらいたいという思いが膨らんだと思われる。

事前に、幼児が小・中学校へお願いに行くことを伝え、校長先生と打ち合わせを行った。そのことにより、校長先生に、幼児が考えを巡らし、主体的に活動を進められるよう、言葉を引き出してもらうことができたと思われる。また、幼児は、自分たちで活動を進めていることを実感することができ、意欲をもって取り組むことができたと考える。

小・中学生に喜んでもらったり、小・中学校の先生にほめてもらったりすることで、回を重ねながら、表現する喜びや楽しさを味わうことができ、意欲も高めることができたと思われる。

また、不安な気持ちを表す友達に対して、安心できるように言葉掛けをする姿から、仲間に寄り添う思いが伺え、温かな仲間関係が育まれてきていると考える。

（3） **幼児の思いを学びにつなげる人との関わり**

教職員アンケートで、知らない人とコミュニケーションをとる機会を設けることも必要ではないかという意見があり、市内の肱川幼稚園へ

遠足に行き、交流する。

昼食の時間となり、肱川幼稚園の給食を見たA児が、「その牛乳、当たり？」と聞く。肱川幼稚園のB児が、「僕のははずれ」と答えると、A児が、「それは、隠れ当たりかもしれんよ」と言う。意味が分からなかったB児に、A児が、「牛乳パックを開いて、点々が出てきたら隠れ当たりなんよ」と説明する。肱川幼稚園の先生が、「そうなんだね。これから、隠れ当たりも見るね」と声を掛ける。

昼食を食べ終わると、幼児は「どれがいい？」と聞きながら、肱川幼稚園の幼児におやつを渡す。「ありがとう」「どういたしまして」「お菓子をあげようと思って、持って来たんよ」などの言葉が、それぞれの場で聞かれる。

遠足後、「Cちゃんの名前を覚えたんよ」「また一緒に遊びたい」との声が聞かれる。

考察

牛乳パックの話題は、共通の話題であったことで、会話を広げることができたと思われる。また、A児は、肱川幼稚園の先生の言葉によって、自分の言葉で伝えられたことを実感できたと考える。

「お菓子をあげたい」という幼児の思いが、自分から、肱川幼稚園の幼児に言葉を掛けることにつながったと思われる。

肱川幼稚園の幼児とやりとりを楽しみ、思いを通い合わせる姿から、人と関わる力が育まれてきていると考える。

（4） 幼児の思いを学びにつなげる表現遊び

友達を集め、A児が作った紙芝居を見る。その後、再びA児が、「また、紙芝居をしたい」と言う。教師が、「チケットを配って、友達を集めたらどうかな」と言うと、「分かった」と言い、チケットを作り始める。そこへ、「手伝ってあげる」と、B児・C児が仲間に加わる。

チケットを配り、お客さんを集めると、B児が司会をし、紙芝居が始まる。

紙芝居が終わると、D児が、「ダンスを見せたい」と言う。他児も、「忍者の術を見せたい」などと言い、みんなで出し物ごっこを始める。

友達同士で、出し物の順番の決め方を話し合い、順番を決め、プログラムを書いたり、チケットを作って配ったり、椅子を並べたりする。

B児が、マイクを持ってきて司会者となり、出し物を始める。

全ての出し物が終わり、教師が、「楽しかったよ」と声を掛けると、幼児は、「もう一回しよう」と言い、プログラムの順番を変えて遊ぶ。

教師が、布を出すと、D児とE児が幕にして、「準備中です」と言う。出し物と出し物の間には幕を閉じ、絵を描いて、コマーシャルを入れる。

降園準備の時間になり、幼児は、「また、明日もしよう」と、続きができるように片付ける。

考察

お話ごっこや出し物ごっこに慣れ親しんでいるため、幼児はイメージを広げ、「やりたい」という気持ちが膨らんだと思われる。

また、教師が、幼児のイメージを実現できるよう関わったり、じっくりと遊ぶことができる場を保障したりすることで、幼児は、夢中になって遊ぶことができたと考える。

さらに、一人一人が役割を担うことで、それぞれが考えを出して遊びを進めることとなり、様々な考えに触れることができたと思われる。

個々の考えを生かし、様々な表現を楽しむ姿から、表現の豊かさが育まれてきていると考える。

6 研究の成果と課題

（1） 小・中学校の教師と共に研修を行うことで、多様な見方・考え方に触れ、保育に生かすことができた。また、幼小中が共通の課題解決に向けて取り組むことで、連続性を踏まえた教育の推進に努めることができた。

（2） 小・中学校や他園など、園外での人との関わりによって、園内の人間関係では味わえない感情を体験したり、思いが通い合う喜びを感じたりすることができた。そこで、強い意志、力、元気、やる気が見られ、「いころ」の育ちを感じることができた。

（3） 友達と同じ目的に向かって遊ぶ中で、幼児一人一人の「～したい」という思いを膨らませることにより、幼児は、主体的に遊ぶことができた。また、個々の思いや考えを認めるとともに、友達同士で、思いや考えを共有できるようにすることで、互いに刺激し合い、協力し合って、遊びの充実を図ることができた。

（4） 今後も、教師一人一人が課題意識をもち、幼児一人一人の思いに寄り添い、認め、支えるという、愛情あふれる関わりをし、人として、社会と関わり生きていくための基礎を培っていきたい。

第１分科会　子育ての支援　　親と子が共に育ち合う子育ての支援

安心感と自信を高める『預かり保育』の在り方を探る

～『遊び』『育ち』そして『教職員』をつなぐ～

京都府　京都市立伏見南浜幼稚園　園長　村上　ちひろ

１　主題設定の理由

本園は１２５年にわたり地域の幼稚園としての役割を果たし、園児は全般的に温かく育まれ家庭や固定した集団の中では安心感をもって過ごしている。

一方で、より多様な人間関係の中や、主体性を発揮する場面では課題も見られる。『教育課程に係る保育』（以後通常保育）のみならず、子育て支援の一環としての教育課程に係る教育時間終了後等に行う教育活動（以後預かり保育）においても『安心感』と『自信』を育てていくことが重要であると考えた。

２　研究の内容と方法

遊びや育ちを『つなぐ』・教職員を『つなぐ』そして子どもと保護者を『つなぐ』ことに注目して預かり保育を見直すことが、子どもの『安心感』『自信』を高めると考えた。そのためには、子どもが『ありのままの思い』を表すこと、そして教職員がその思いをまずは全面的に受け止めることが大切だと考えた。

特に少人数集団での姿、異年齢児の関わりの姿、保護者と子どもの関わりの姿に焦点をあて、具体的な環境構成や援助の在り方を探った。

また、預かり保育年間計画の見直しも行った。

３　実践事例

〇エピソードより

（１）Ａ児（３歳児）

入園当初、不安を感じやすく、母親以外の大人や子どもに対して、心を開く姿はあまりみられなかった。母親とゆったりと遊ぶ経験も少なかった。

①　大好きなゲーム　５～７月

《５月初旬》担当教員と一緒に、同じ色や形の札を取るゲームを始めた。繰り返し遊ぶ中で、素早く取ることが楽しくなった。

《５/２３》通常保育中にもＡ児が「あのゲームしよう！」と担任を誘い「Ａの勝ちや」「負けへんで」と一緒に遊ぶことを楽しんだ。

《７/１１》初対面のボランティアと担任が預かり保育を担当した。Ａ児はボランティアとの最初の挨拶のときから、安心した表情になり、自分から少しずつ近付き「一緒に遊ぼうよ」と声を掛け、何度もゲームを楽しんだ後、メモリーカードを持ってきて繰り返し遊ぶ。以後この遊びもＡ児のお気に入りの遊びとなる。

②　ママと一緒にしたい　８月

《８/７～》年長児の遊びに興味をもち、サイコロを振っては、机の上でコマを動かして遊び始めた。教員がＡ児と一緒に大きな紙に丸シールを貼り、手作りすごろくを作った。降園時「ママと遊ぶ」とそのすごろくを持ち帰った。翌日園に「ママと遊んだで」とうれしそうに持ってきた。

《８/２０～》メモリーカードで遊んでいる途中に母親が迎えに来た。母親も加わり、ゲームを最後までした。そのカードを家に借りて帰った。

《８/２４登園時》担任が母親に、ゲームを持ち帰って遊ぶことが、負担になっていないかと尋ねると「全く大丈夫です」とおっしゃった。母親もＡ児との時間を大切に思っていることが分かった。

考察　園での様子を伝えるだけでなく、“園で楽しんでいる遊び”を実際に一緒にすることで、母親が子どもの思いを感じ、園生活の理解を深めることができた。家庭での親子の関わりも充実したものとなった。

（２）Ｂ児（３歳児）とＣ児（５歳児）

Ｂ児は入園当初、気持ちの切り替えが難しく、初めての状況や大勢の人がいる場に不安を感じていた。

①　大好きなお姉ちゃん

《４/１８通常保育》Ｂ児とＣ児は静かな空間や教職員との関わりを求めて、園長室に来た。そこで出会った２人は絵を描いて遊び始めた。

《４/１９通常保育》門で迎えてくれたＣ児にＢ児は笑顔で手を振った。Ｂ児の母親も「Ｃちゃん昨日はありがとう！Ｃちゃん待っててくれはってうれしいなぁ」と喜んだ。その後、保育室で一緒に描いた絵を見せ合い笑顔になった。

考察　子どもにとって安心感をもつ『きっかけ』や場はそれぞれ違う。教職員は『一人一人の“居場所”があるか』の視点で子どもたちを捉えることが大切であることが再確認できた。

また『安心感』をもった姿を教職員間や保護者と共有することで、“子ども同士のつながり”がより確かなものになることも明らかになった。

②「まだ遊ぶ！」

《６/１午前保育の日》預かり保育利用初日

預かり保育参加の３歳児３人と担任は保育室で弁当を食べた後、遊んでいた。その遊びに担当教員が加わった。その後、遊戯室に移動し、

１４時以降は他のクラスと合流した。
そこでC児と出会い、安心した表情で様々な遊びをする。１５時過ぎに母親が迎えに来られたときには「まだ遊ぶ」と、２０分ほど遊び続けた。

考察　担任とB児がいる場に、担当教員が来て遊ぶこと、そして４月から関係ができているC児がいることで、預かり保育初日も安心感をもって活動できた。

（3）D児（4歳児）ありのままの思いを表す
母親の就労に伴い４月後半より預かり保育を利用し始めた。自分の思いを表すよりも、周囲の大人がどのように思っているかを気遣う姿が見られた。
《5/３１》預かり保育時、ゲームで負けたとき、普段ほとんど泣かないD児が激しく泣く姿が見られた。降園時、母親は『最近、D児と関わる時間がとても少なくなって、無理をさせている』とおっしゃった。
《6月》他児の降園後、担当教員に対して、少し強い口調で「先生、こっち持ちなさいよ！」「次はあなたの番よ」と言う姿が見られた。
《7/３１》マットを敷き、体を休める場所を用意した。体を横にしながらD児は担当教員に家でのことを話し始めた。『一人で寝ることもあること』『途中で母親が様子を見に来たときは“寝たふり”をしていること』など小声で話した。

考察　６月、担当教員と二人になったときだけは、いつもとは違う態度や言葉で、担当教員がどのように関わるのかを試していたと思われる。担任と担当教員が互いにD児についての情報や感じたことを伝え合い、心の揺れを感じ取って関わったことで、徐々にD児がリラックスして“ありのまま”の姿を見せるようになったと思われる。

《１１/１４通常保育》園外保育で鉄道博物館へ行った翌日、絵の具で汽車を描いて遊んだ。担任は子どもたちと一緒に黒だけでなく、様々な色の絵の具を準備した。D児が「どの色も使ってもいいの？」と聞いたとき、担任は「いいよ！」と答えた。友達や教師の様子を伺うことなく、パステル系の様々な色を使って意欲的に表現し、「できた！」と満足そうに活動を終えた。

考察　黒や灰色を使う子どもが多い中、“私は私”と自分の使いたい色を選んでいた。
通常保育と預かり保育の両方で『自分のありのままを表しても、先生たちは受け止めてくれる』という安心感をもつことで、自信をもって『自分らしさ』を表す姿が見られるようになったと思われる。

○『指導計画』見直しのポイント
１　期ごとの『キーワード』
　１とにかく安心→２思いによりそって→
　３快適に→４深まって→５つながって
２　学年ごとのねらいや活動（必要な期のみ）
３　家庭との連携の具体的な配慮
４　『“居場所”があるか？』の観点

4　研究の成果と課題

○子どもの遊びや育ちをつなぐ
・通常保育と預かり保育では、違う姿を表すこともあり多面的な内面の捉え方が深まった。
・異年齢児との関わりが深まり、力を発揮し自己有用感を高めることができた。

○子どもと保護者をつなぐ
・子どもの姿や思い、願いを保護者と園で、より深く共有することができた。
・特に利用し始めの時期は、子どもの心の安定のために、保護者により具体的に子どもとの関わり方を積極的に伝える大切さを再確認した。

○教職員をつなぐ
・教職員が子どもの『心の揺れ』を捉えて共有する（つなぐ）ことで、『遊び』『育ち』『子どもと子ども』『子どもと教職員』『子どもと保護者』がつながっていくことを再確認した。
・全教職員で育ちの過程や、その時々の『課題』を共有することが、より深い安心感や自信につながることを再確認した。
・それぞれの教職員の勤務時間の違いや働き方改革などにより、担当教員と他の教職員の話し合いや全員参加の研修などの時間は減少傾向にあるのが現状である。
　しかし、この制約の中での“連携”の在り方を引き続き探っていく。（日々の短時間での子どもの姿の共有や、共通の文献や資料を使っての個別研修など）

○指導計画を常に見直す
・学年別のねらいや環境構成、通常保育の指導計画との関連性をさらに追及する。
・子どもが預かり保育に求めている２つの願い『家のように、ほっこりと過ごしたい』『様々な活動をまだまだ楽しみたい』を満たせる環境構成や援助を引き続き探っていきたい。

第１分科会　子育ての支援　　親と子が共に育ち合う子育ての支援

親子で一緒に楽しもう

～親育ち子育ちを支えるために～

和歌山県　御坊市立湯川幼稚園　園長　上山　弘子

１　主題設定の理由

現在、時代の変化により、核家族で育ってきている保護者が多くなってきている。利便性重視の時代となっていることや、地域とのつながりの希薄化などもあり、保護者自身のいろいろな経験も少なくなっているのではないだろうか。また、子育てを学ぶ機会があまりないまま親となり、手探り状態での子育てに、悩みや不安、自信がもてない等ストレスを抱えていたり、我が子しか見えていなかったりする保護者が増えてきているように感じる。過保護、過干渉になっている保護者も多い。

そこで、幼稚園は出会いの場でもあると考え、『親育ち・子育ち』の場として、いろいろな経験をしながら親子や他園児、保護者同士のつながりを深め、子育てが楽しいと感じられるような支援の在り方を考えていくため、本主題を設定した。

２　研究の内容

（１）親子で共通の体験を楽しみ、親子の触れ合いを深める。

（２）保護者に保育に参加してもらうことで、園での活動内容や様子を知り、家庭での親子の触れ合いにつなげる。

（３）園での食育活動を通して、保護者の食への関心を深める。

（４）子どもたちの園生活の様子や育ちを、保護者に分かりやすく、また保護者と共有できるように発信していく。

３　実践事例

【事例１】親子で一緒に活動しよう

（園内・園外・地域の方々と）

親子でいろいろな体験をしたり、活動に参加してもらったりしたことで、保護者自身の経験が増え、子どもと触れ合って、親子で同じ体験をすることで、家庭での会話の増加につなげていく。また、一緒に体験する中で、他園児や保護者との関わりも増え、つながりが深まっていくのではないかと思い、参加できる内容を考え、実施してきた。

具体例として…

・サッカー体験教室

・凧揚げ

・水遊び　など

考察

今までの参加は、ほとんどが母親だったが、昨年度は、体験の内容によって、父親の参加もあり、良い傾向だと感じている。園児も保護者が来てくることがうれしく、楽しい時間を過ごすことができていた。

一緒に活動した保護者からは「知らなかった」「したことがなかった」「またしてみたい」「楽しかった」「子どもと一緒にできて楽しかった」などの感想をいただいた。親子で一緒に体験することで保護者の経験の幅が広がり、少しでも子育てに活かしてもらえるのではないかと感じる。

【事例２】幼稚園オープンデー

保護者自身の都合に合わせ、好きな時間に園に来て普段の保育に参加してもらうオープンデーを設けた。保育の内容を選んで来るのではなく、童心に返り、どんな遊びでも楽しんでもらいたいという思いから、保育内容や時間設定を事前に知らせることはせず、自由に参加してもらえる形にした。我が子や他園児と一緒に遊ぶ時間をもち、遊びの楽しさや、子どもと過ごす楽しさを感じたり、保護者同士のつながりの深まりにもつながるのではないかと考え、実施した。

考察

少数ではあるが、「いつ行けばいいか分からない」「保育内容の予定を知りたい」という意見もあったので、オープンデーの取り組みの趣旨を伝え、理解して参加してもらえるよう努めた。新しい取り組みであるので、年長・年中の保護者より、年少保護者の方が、すんなりと受け入れ、自由に参加してくれていたように感じる。

（一緒に遊んでほしい）という教師の気持ちとは

違い、保護者同士が集まっておしゃべりばかりしていることも多かった。遊びに入ってもらえるように、教師が声掛けしていたのだが、見方や考え方を変えると、保護者同士のつながりが深まっていくためには、おしゃべりの輪も大切なことであると考え、様子を見ながら声を掛けるよう心掛けた。回数を重ねるうちに、保護者も本当に楽しそうに子どもたちと遊び、おしゃべりの時間とのメリハリがあるように感じた。オープンデーを設けたことで、保護者が園に来る機会が増え、園での子どもの様子を知ることができて、安心へとつながっている。また、気になることを、教師に気軽に相談する機会が増えているようにも思う。

【事例３】食育活動

飽食の時代、子どもたちは偏食も多く、食べることに意欲を示さない子も増えてきている。

朝食抜き、嫌いな物は食卓に出さないなど、保護者の食への意識の低さも感じられるため、食への関心を深めたいと思い、以前から食育活動に取り組んでいる。

具体例として…

・梅干し・梅ジュース作り
・野菜の栽培
・親子クッキング

考察

野菜の苗を見ても、何の野菜か分からない保護者が多く、ポットごと植えようとしたり、土の上に置くだけだったりなどもあったので、保護者に体験してもらえたことは良かった。

降園時に、子どもと一緒に生長の様子を見たり、収穫した物を持ち帰ったときには、その野菜を使って料理してくれることも多く、親子の良い時間になっているようだ。保護者からは「子どもから〇〇作ってとリクエストされました」などの声があった。苦手な物でも、自分が育てたり、調理したりした物は特別で、おいしくいただける子が多い。親子クッキングでも、野菜嫌いの子が残さず食べている様子に驚いていた保護者も多く、実体験が大切だということを感じるとともに、食べないから作らないという考えは改めてくれた保護者もいる。

【事例４】情報の発信を通して

子どもたちの園生活の様子を、毎月１回、園だより・クラスだより・なかよし広場だより(時間外保育)で発信している。また、それ以外にも、定期的ではないが、ドキュメンテーションを作成し、掲示した。保護者が見て分かりやすいように、保育内容・子どもの様子を可視化し、活動や遊びの中で、子どもたちは何を学んでいるのか、どのような面が育っているのかを分かりやすく知らせるように心掛けた。

考察

毎月の園だよりやクラスだよりは、配布した後に保護者からの感想等を改めて聞いたことがなく、一方的な発信になっているので、クラス懇談会等の機会に話題にあげることも良いかもしれないと思う。

保護者が参加していない行事や、子どもの取り組みについて掲示することで、興味を示す保護者が多くなり、保護者同士で話題にあがったり、「(子どもが)言っていたのはこのことだったんですね」と納得したりしている様子も見られた。

４　研究の成果と課題

活動内容について、保護者にアンケートをとった結果、『子どもと一緒にいろいろな活動ができて楽しい』『オープンデーは自分の好きな時間に行けるのが良い』『回数が多くて大変』などの意見をいただいた。保護者に負担を掛けず、自由に参加できるようにと考えて実施したが、負担に感じている保護者もいた。今後、活動の意図を伝えながら、実施日や内容を検討し、保護者がより積極的に参加しやすいようにしていきたい。

研究を進めていく中で、保護者の意識を変えていくことは本当に難しいと感じたが、保護者が、園で子どもと一緒にいろいろな経験をすることで、家庭での親子の触れ合いや会話が増えたという声もあった。少しずつ、子育ての楽しさを感じることにつながってきている。また、子どもと一緒に遊ぶ楽しさを感じたことから、保護者が主体的に、『お楽しみ会』として「ドッチボール大会」を企画してくれ、楽しい親子でのひとときとなった。今後も保護者同士のつながりを深め、子育てが楽しいと感じられるような支援の在り方を工夫しながら、取り組みを続けていきたい。

第２分科会　学び・協同　　育ちと学びをつなぐ遊び

豊かな学びができる子どもを目指して

～協同性の育ちから～

滋賀県　長浜市立長浜幼稚園　前園長　曽我　百合子

１　主題設定の理由

本園は長浜駅から徒歩５分の市街地にあり、子どもたちは整備された公園や遊び場等で遊ぶことが多い。また、家庭では静的な遊びがほとんどで、同年齢の子と群れて遊ぶことはあまりなく、園でも子どもたちが心と体を使って夢中になるほど、遊ぶことは少ない。そんな実態から、豊かな学びができる環境作りが必要と考え、地域の方の協力を得て、園庭の樫の木の整備を行ったところ、子どもたちの木登りへの挑戦意欲がわき、自ら木登りをする子が増えた。また、樫の木は四季折々に変化して、様々な遊びもでき、協同性の育ちも期待できると感じた。そこで、この樫の木を通して、様々な遊びをする子どもの姿から協同性の育ちや環境の構成を明らかにしていくことにした。

２　研究の内容と方法

（1）『協同性』の視点を次（ア～キ）のように予想して仮説とする。そして、子どもが継続した遊びの中で主体的に夢中になって遊び、充実感や満足感を味わって豊かな学びをしている具体的な姿から検証する。

ア　目的を共有し、相談しながら遊びを進める

イ　試行錯誤や工夫をする

ウ　友達と力を合わせたり協力したりする

エ　役割分担をして、役割を意識して遊ぶ

オ　友達に譲ったり、我慢したりする

カ　友達のよさやもち味を感じながら遊ぶ

キ　友達と充実感をもってやり遂げる

（2）子どもの協同性の育ちから豊かな学びができる環境の構成を明らかにする。

３　実践事例　５歳児

＜６月＞『木に登りたい！』

①　A児は、木登りが得意なB児に木に登りたい思いを話す。B児は「登り方、教えてあげる」と登っていく。B児は木の上から「私のお手本どうやった？応援するから登ってみて」とA児に声を掛ける。A児は「登ってみる」と言う。②保育者も「見ているから、頑張って」とA児を応援する。A児はB児と保育者に見守られながら木の真ん中辺りの分かれ目まで登り、「Bちゃん登れた！先生も見て」と喜ぶ。保育者も笑顔で「今まで登れなかったのにやっと登れたね。Bちゃんに教えてもらったからだね」と言う。③A児はこの日から更に木登りに挑戦し、７月初めには上まで登れるようになって喜ぶ。

＜考察＞・・・子どもの姿から仮説を検証する。

①ア：自分と同じ目的の子に関わり、自分の目的に向かって遊ぶ。

②ウ：友達や保育者に応援してもらって、目的を達成しようとする。

③キ：自分の目的をやり遂げ、満足感を味わう。

＜１１月＞『どんぐりを取りたい！』

子どもたちは樫の木の枝の先に小さなどんぐりができ始めたことに気付き、どんぐりを取り始めた。

①A児とB児は「今日こそ、どんぐり全部取ろう！」とどんぐりを入れる箱を木の根元に置く。A児は木の分かれ目まで登り「私、あっち（東側）のどんぐり取ってくる」B児「分かった」と、別々の方へ登っていく。②「私も混ぜて」とC児が来る。C児が東側へ登ろうとするとB児は「Cちゃん、そっちはだめ（A児とすれ違えない）」と強い口調で言う。C児は「何で？そんなこと言わないで」と困った顔をする。B児が「今、Aちゃんが下りて来るから」と言うと、C児は登りたい気持ちを抑え、待ってから、どんぐり取りを始めた。③A児は再び登り、「３個取れた！後で１個ずつ分けよう」と言うが、手に持って動くことは怖いため、下に落とそうとする。それを見たB児は「私がしてあげる」と、どんぐりを受け取りに行き、「３個取れたよ。誰か拾って」と声を掛ける。下にいたD児が「拾い役するわ」と拾って箱に入れた。④A児は手を伸ばしても取れないどんぐりを

見付け「Ｂちゃん、あのどんぐり、取れない」とＢ児に助けを求めて取ってもらう。A児は「先生、ＡとＢちゃんとＣちゃんと３人でどんぐり取った」とうれしそうに言う。保育者は「見ていたよ。３人で力を合わせて取れてよかったね」と言う。

＜考察＞

①ア：自分の思いを伝え、友達の思いを聞いて目的を共有して、遊びを進めている。

②オ：友達の思いを聞き、友達に譲って我慢する。

③ウ：友達の思いを理解して、協力する。

④キ：友達ができないことを自分が取り組んで、目的を達成しようとする。

＜１２月＞『樫の木のどんぐりの品物は特別！』

自分たちで取った樫の木のどんぐりは２０個ほどであった。子どもたちにとって、貴重で、特別であるため“カッシー”と呼び、A児とＢ児は長い間、大切にロッカーにしまっておいた。

①ある日、A児とＢ児はカッシーを出してきてペンで顔を描き、材料を組み合わせて小物を作り始める。Ｅ児が来て「入れて」と言うとA児とＢ児は「いいよ」と言う。Ｂ児は「Ｅちゃんはきれいな物、作れるし、よかった」と喜ぶ。②A児が「(お店の) 看板もちゃんとしよう」と言うとＢ児は「飾り屋さんにしよう」と提案し、A児とＥ児は「いいよ」と言う。Ｂ児はカッシーをペットボトルの蓋に入れ、フェルト玉を乗せて「カッシーのお風呂みたい」と品物を作る。

そして「これ、特別だから何円にしようかな、１００円って書いて」とＥ児に頼むとＥ児は１００と書き、続けて０をたくさん書いて「０、いっぱい書いた」と言う。A児が「すごい、これ、一番前に置こう」と言うとＢ児は「これは特別！」そして、「お店、始めよう」と言う。また、A児は「(品物を種類ごとに) 分けよう」と言う。③Ｂ児は「Ａちゃん、レジする？Ｂは、渡す人がいい」と言うとA児は「いいよ」と言う。Ｅ児は「私は（持ち帰りの）袋、作るね」と言う。④開店するが、客は２，３人しか来ない。他店は大勢、客が来て繁盛している。Ｂ児が「まだ、めっちゃ、(商品) ある」と言うとA児は「どうしよう、一緒に言ってみる？」と言い、Ｂ児が「せーのーでーは」と言うと３人は「いらっしゃいませ」と客を呼び込む。⑤３歳児が来る。Ｂ児が「何が欲しいですか？おすすめはカッシーちゃんです」と言うと３歳児はお金を渡す。Ｂ児はお金を受け取り、A児に渡す。A児はお金をレジに入れ、Ｅ児が品物を袋に入れて渡す。Ｂ児が「やったー」と言うと３人は顔を見合わせ“にこっ”とする。

＜考察＞

①カ：作ることが得意な友達のよさを感じている。

②ア、イ、ウ：店の名前決め、品物作り、値段付け、品物並べ等、本物のお店のように工夫している。

③エ：レジ役、品物を渡す役、袋作り役等、役割を分担している。

④ア：お店をやり遂げるという目的実現のため友達と相談して客を呼び込み、遊びを進めている。

⑤エ、キ：役割を意識した動きをしている。また、特別な品物（カッシー）も売れて、友達とお店屋をやり遂げた充実感を味わう。

４　研究の成果と課題

（１）成果

①仮説としてあげた協同性の育ちと考えられる姿は、実際の子どもの姿から検証することができた。また、目的を共有して友達と様々に関わって遊ぶ中で豊かな学びが育まれていることも分かった。

②協同性を育むための環境の構成について

・園の樫の木から取った特別のどんぐり（カッシー）を大切にしている子どもの気持ちを尊重して、協同性の育ち、教育的価値を考えた遊びの展開を見通し、意図的に子どもの気持ちと遊びを継続していくことが大切である。

・子どもたちが友達と目的を共有し、一人では得られない遊びの面白さを味わえるように、友達と共に関わり合って遊べる保育を計画していく。

・子どもが互いの思いや考えに気付き、自分たちで解決していくために子ども同士で考えたり、相談したりする状況を作る。

・友達と一緒にやり遂げた満足感が味わえるように、協力や役割分担が必要な環境を作る。

（２）今後の課題

今回は５歳児の姿から明らかにしてきたが協同性の育ちには５歳児のこれらの姿に至るまでの３・４歳児の発達過程も大切である。今後、３・４歳児の協同性に至る具体的な姿と環境の構成にも着目して、研究していきたい。

第２分科会　学び・協同　　育ちと学びをつなぐ遊び

遊びの中で共に育ち、学びを育む

～身近な環境との関わりを通して～

和歌山県　和歌山市立宮前幼稚園　教諭　小出　紗有里

１　主題設定の理由

（１）近年、保護者も子どもも人との関わりが希薄になってきたように感じられる。自園においても、不安から自信をもてず、自分からは人と関わりにいけなかったり、自分の思いを相手に言葉で伝えたりすることが難しい子どもの姿も見られる。

（２）進級当初の５歳児には、保育室の環境や担任が代わったことにより、登園を渋ったり、遊びを見付けることが難しかったりする子どもの姿が見られた。そのため、子どもたちが安心して過ごし、自己の力を発揮しながら、子ども同士が共に認め合い、共に学び合えるような学級経営をしていきたいと考えた。

（３）子どもが身近な環境との関わりの中で、**“学びのはじまり”**を経験することや、遊びの中で共に育つ姿を捉えることによって、子どもの学びには、どのような環境や教師の援助が必要かを検証するために本主題を設定した。

２　研究の内容と方法

①全園児がどの保育室でも遊ぶことができるように空間や好きな遊びの時間を十分に確保する中で、子どもが主体的に意欲をもって遊ぶ環境を構成する。

②子ども一人一人の発達を理解し、環境と関わる中で生まれる、**“学びのはじまり”**となる姿を捉えていく。

③身近な環境の中で、子どもがどのような気付きをしてどのような学びをしているのかを考察し、教師の援助の在り方について事例を通して検証する。

３　実践事例

「藤の種を採りたい！（１０月）」５歳児

宮前幼稚園は、大きな道路や工業・商業地帯に囲まれており、自然に触れることが難しい場所にある。そのため、園庭では、四季折々の草、花、実のなる木などを育て、自然を身近に感じることができるようにしている。

ある朝、男児数人が藤棚の下で「焼き芋ごっこ」を始めていた。遊びの中で、役割分担をし、芋を採るチーム、芋を焼くところを作るチーム、流しそうめんをするチームに分かれて遊んでいた。以下、芋を採るチームとＡ児についての事例である。

芋を採るＢ，Ｃ児の動き	Ａ児の動き	教師の援助
○藤の種を採ろうとする。 Ｂ「豆（種）採りたいけど届かんな」 Ｃ「高くて届かん」	○教師と一緒にいて安心している。 “学びのはじまり” Ａ「あれ（ゲームボックス）使ったら？」	○Ａ児と一緒にＢ児、Ｃ児を見守る。 ○様子を見守る。 「どうしたら採れるかな？」と問いかける。
Ａ，Ｂ児でゲームボックスを一つ運ぶ		
Ｃ「ありがとう。やってみる。グラグラしてて怖いな」 Ｂ「僕持っとこうか」 ○まだ種に届かない。	Ａ「ゲームボックス持ってこようか？」と言ってもう一つ運び、縦に積み上げ、見守る。	＜教師の願い＞ 他の友達の遊びに興味をもってほしい
Ｂ「Ｃ君怖いと思うから、僕支えといてあげる」 ○種に届き、たくさん採ることができる。 Ｂ，Ｃ「うん！」	笑顔で他の遊びを見つけに行く。	「Ａ君のアイデアで、種を採ることできたね。Ａ君のアイデアすごいな」

考察

①Ａ児はいつも教師の傍に寄り添いながら、友達の様子を見ている。この事例でのＡ児の行動は、遊びに参加していないが、気持ちは遊びに参加していた。このことに気付き、タイミングを逃さず声を掛けたことで、Ａ児に適切な援助をすることができた。

②夏にゲームボックスを使ってセミの抜け殻捕りをした経験が活かされ、友達と協力しながら藤の実の収穫を楽しむことができ、友達の良いところに気付いたり、一緒に遊ぶことの楽しさを感じたりすることにつながった。「藤の種を採りたい」という意欲が**“学びのはじまり”**となり、子どもたちが意見を出しながら試行錯誤する学びの場となった。

③教師はこの藤を教育的価値のある環境として捉えていなかった。藤の実がなる時期に、子どもたちは実とどのような出合いをするのか、藤の実と関わる中で子どもたちがどのような学びをするのかを教師はしっかりと把握しておく必要があった。このことから、再度職員全員で園内外の環境を見直し、どのような環境が必要か、また環境をどのように活かしていくかなど共通理解するとともに、教師の質を高めていく必要性を感じる。

「やってもいいの？（１１月）」５歳児

５歳児の動き	３，４歳児の動き	教師の援助
○木の素材でワッフルを作る。 「そうや！ワッフル屋さんしよう」 ○様子を見ていた他の子どもたちも参加する。 「ジュースもいるな」 「このケーキも入れよう」 「飴もあるで」 ○店員さんの人数も増え、段ボールでオーブンや、素材でレジ、お客さんが食べるところの席を作りお店が大きくなる。 ○お客さんが減る。	○戸外や１階で遊ぶ ○４歳児が２階のワッフル屋に遊びに行く。	○声掛け「美味しそう！食べたいな！」 ＜教師の願い＞ ５歳児は２階で遊ぶという固定観念を外してほしい。
「お店に来てください」と４歳児に声を掛ける		
“学びのはじまり” ↓ 「そうなん！やった！」 ○１階の保育室に自分たちで必要な道具を運び、店を再度作り、役割分担しながら遊ぶ。 ・注文をとる人 ・ジュースを入れる人 ・店員さん ・レジをする人 役割分担しながら遊ぶ。	○３，４歳児が遊びに行く。	○声を掛ける。 「１階でもできるよ」

ワッフル屋をして遊ぶ子どもたちが、戸外にいる友達にも声を掛けると、戸外にいた友達もお金とカバンを持ってお客さんになったり、一緒に店員として参加したりして遊ぶようになった。

＜考察＞

①以前から、年長児は園庭と２階の保育室に分かれて遊んでおり、教師は子ども同士の姿が見えにくく、安全面から見ても子どもの動きを把握することが難しかった。そのことから、職員間で話し合い、子どもたちの遊びの動線を考え、１階にある保育室を環境として用意した。また、この事例の子どもの姿から、子どもたちは「年長児は２階の保育室で遊ぶ」という固定観念をもっていることが分かった。

②子どもたちの姿を捉えた上で、「１階でもできるよ」という教師の声掛けにより、子どもの固定観念が崩され、子どもたちの遊びへのさらなる意欲が湧き、**“学びのはじまり”**につながったのではないかと考えられる。

③１階へ移動したことによって、他のところで遊んでいる友達の姿も見えやすくなり、３，４歳児の子どもと関わることも多くなったと考える。この遊びの中では、より異年齢児との関わりが生まれ、５歳児にとっては、小さな学年の友達が親しみやすいように、姿勢を低くして優しく声を掛けるなど、思いやりの心が芽生える姿も同時に見られた。

4　成果

・子どもの心が安定し、自信をもつことができるような時間の確保と環境を用意することで、次第に友達へと目が向き、一緒に遊ぶ中で互いに育ち合う遊びへとつながっていったのではないかと考える。

・十分な遊びの時間の中、自分の好きな遊びを友達と一緒にすることで、「良い考えだね」と自分の考えが受け入れられた喜びが意欲となり、「もっと一緒に遊びを楽しくしよう」と共に考えを出し合い、互いに育ち合う遊びへと向かっていくことが分かった。

・今まである環境を再度見直し、教師や子どもの固定観念を外すことが、子どもたちのさらなる遊びへの意欲につながり、共に育つ環境が生まれることが分かった。日々の保育から、ありのままの子どもの姿を受け止め、一人一人の育ちを全職員で共有し、どのような環境構成をするか、また、いつ援助するかなどをはじめ、教師の援助の在り方について考えることが大切であると再度気付くことができた。

5　課題

・季節ごとに変化する、桜、ビワ、柿などの木や草や花などの植物、そして周りに多くの生き物がいる環境は、子どもたちがたくさんのことを学ぶことができる。その自然の教育力を活かし、教師が固定観念に縛られることなく、身近な環境を把握し、柔軟に環境を捉え、子ども一人一人に寄り添った保育をしていく技術が求められる。

・子どもが自由に行き来できる空間が広いことから、教師間で密に連携を図り、子どもへの理解を深めながら、援助の在り方について共通理解をしていくことが必要である。

・個々の成長と集団としての**“学びのはじまり”**をしっかりと捉え丁寧に見取り、保育していくことが大切である。それに加え、学年の垣根を越えて、子どもたちが遊びの場を広げることで、互いに学び合う環境になるよう意識して、これからも保育に励んでいきたい。

第３分科会　教育課程　　質の高い幼児教育の実現に向けて

幼児の主体性を育むために

～教師の資質の向上を目指して～

奈良県　斑鳩町立斑鳩（いかるが）幼稚園　園長　北吉　実代

１　園の概要

本園は奈良県の北西部に位置し、近くには世界遺産で知られている法隆寺がある。様々な四季の移ろいが楽しむことができ、伝統ある文化と豊かな自然の環境に恵まれた地域に所在する。今年度は、年少２４名２クラス、年中２０名１クラス、年長２７名１クラス、計７１名の４クラス編成であり、支援を必要とする幼児が７名在籍している。職員は園長、総括主任、クラス担任４名、特別支援加配５名、保育補助員１名の１２名で幼児の豊かな育ちを願い『一人一人の思いに寄り添う保育』を目指して取り組んでいる。

２　主題設定の理由

私は本年度より新任園長として携わっている。本園の教員は、保育経験が浅く、園児の思いを深いところまで読み取ることに慣れていない。この実情から職員が協力して園を作り上げ個々の教員が自分らしく輝けるように「チームワーク」を念頭に、幼児が自発的に活動するための教師の関わり方について職員研修を重ね、『保育の質』の高まりを目指して取り組むことにした。

３　研究の仮説

（１）　教員としての指導力の向上を目指して『自己評価シート』を使って振り返りをすることで幼稚園教師としての自覚を高め、保育の在り方や専門性において改善ができるのではないだろうか。

（２）　他学年の教員が、遊びの場の構成や幼児の遊びへの興味、関心を共有するなど連携することで、職員間のつながりができ、保育の幅が広げられて幼児の育ちを様々な方向から捉えることができるようになるのではないだろうか。

（３）　教員は、幼児の確かな成長を支えるために、いろいろな遊びをする幼児の姿から「遊び込めているか」「何を考え、何を見つめて遊んでいるか」をしっかり見取るようにする。また、幼児と共に遊びをどのように展開していくか、遊びを通して幼児が今何を学び、何が育とうとしているか、今後育てたい力は何かを探っていくようにする。このような過程の中で教員は、試行錯誤や反省を繰り返し、指導力をつけるのではないだろうか。

（４）「幼児の主体性を育むためには」幼児からの発信を待つ教員の心の余裕や、幼児の自発行動を促すための柔軟な感性をもつ教員を育てることが必要ではないか。

４　研究の内容と方法

（１）　「自己評価シートの作成」を通し教育目標や保育の振り返りを行い、教員自身が大切にしていかなければならないことを意識させる。

（２）　各クラスの実態を理解し、幼児の自発活動の充実をどのように援助するか保育内容を検討する。また、「保育環境の見直し」「各クラス・各学年の活動内容の共通理解」「異年齢交流の充実」「保育内容に関する保護者へのアプローチの在り方」等を具体的に計画する。

（３）　実践をもとにポートフォリオの活用や『奈良県版就学前教育プログラム（はばたくなら）』を活用して職員研修を行い、「小学校までに育てたい１０の力」の何が育っているのかを探る等、職員間で共通理解をして幼児理解を深める。

５　実践事例

取り組み（１）

年度当初、教員の指導力向上を目標に保育の計画性・保育の在り方の確認や幼児理解・保護者対応の仕方、教育者としての意識モラルの向上等を目指し『自己評価シート』の作成に取り組む。

考察

- 教員の保育経験の違いで、保育計画の見通しに差があることを感じた。
- 幼児一人一人の見取り方や専門知識・技能の足りなさ、学級経営・保護者対応への不安等に、教員は自信のなさを感じていることが伺えた。
- 中には他学年との連携・職員間の連携の必要性〈異年齢交流の充実〉を感じている教員がいた。
- 評価シートをもとに、職員研修を行い、今後の課題や協力体制について共通理解していく必要性を感じた。

取り組み（2）

（事例１）

「幼児に向けるまなざしを大切にしよう」

『タンポポの わたげ みつけたよ！』年中４月

A児は、４月に入園してきた４歳児の男児で幼稚園の出来事すべてが、新しい発見であった。みんなでイチゴ摘みの体験を楽しんでいるとき、タンポポの綿毛に息を吹きかけ、タンポポの花を摘むこともせずに優しく関わっていた。担任が「Aくん、いっぱい　綿毛が飛んでいったね」と認めるとA児は「うん　タンポポの赤ちゃん」と、とても満足そうに笑っていた。

考察

- A児の姿を肯定的に受け止める教員のまなざしの大切さを感じるとともに、A児の気付きに心を寄せA児の表現を認める教員の存在の大切さを感じた。
- 保育の振り返りから、担任の撮影した写真をみるとA児の心の動きのあるところを捉えていることが伺え、その子なりに表現しようとしている姿を見ていることが分かった。

（事例２）

「子どもの育ちにじっくり向き合おう」

《５歳児の姿から》

鬼ごっこをしたりボール遊びをしたりして遊んでいるが、集中力がなく次々と遊びが変わり夢中になれる何かを探している姿が見られた。

幼児の姿から、どのような力を育てたいか共通理解する。

【課題】

- 考えたり試したりして集中して遊ぶようになる。
- 自分の考えや思いを、言葉で伝えるようになる。

『光る泥団子作ろう』年長　６月初旬

泥団子を作ってごちそう作りをして遊んでいた子どもたちだがすぐに崩れてしまい、なかなかいい泥団子ができない。

B児「なかなかできへん」「すぐ崩れる」うまくいかないことに不満の様子である。

担任「B君　いろいろな場所の土で試してみたら？」「お兄ちゃんが、青組のときいっぱい考えて、お友達と作ってたよ！お兄ちゃんに、どうしたらいいか聞いてみるのはどう？」と提案する。

翌日、B児は裏庭で

B児「お兄ちゃんが言ってたのここやで」「こうして、足で削るといいねん」と、泥団子作りに夢中になりだした。B児の影響を受け、年長児が集まり、どのようにするとうまく泥団子が作れるのか何日もかけて探り出すようになる。

C児「このさら砂を手につけるねんで。こすったらピカピカになるねんで」

D児「まだ、こすったら壊れるで。手に砂が付かなくなるまで砂かけるねん」とうまく作ろうと一生懸命である。

B児「昨日ビニールに入れてたのに、ヒビ割れてる。なんでやろ」と悔しがっている。

B児の周りに友達が集まり「ビニールくくってたか」「乾燥しすぎたん違うか」「さら砂かけ足りへんかったんかな」とB児の泥団子がヒビ割れたことに、ショックを受け「何が悪くて壊れたのか」原因を探ろうとしている。

考察

- 教師間で幼児の姿から課題を共通理解し、育てたい力を明確にしたことで、教師の援助の視点がはっきりし教師も遊びを楽しむことで，集中して遊ぶようになったと思われた。

・　教師の提案で刺激を受けて、自らが遊びを発見し「おもしろい」「やってみたい」「不思議だな」を考えたり試したりして、様々な意見を出し合い根気よく遊ぶようになったと思われる。

取り組み（3）

（事例1）

「ポートフォリオを作成して
幼児の姿から育ちを読み取ろう」

年長　6月

友達に相談できたのかな！

持たなくてもどうしたら倒れへんかなぁ

作る中で、ガムテープをちぎる子・貼る子・段ボールを支える子など役割分担したり協力したりして作る姿が見られた。また、友達と考えを出し合いながら工夫して作り、どんどんイメージを膨らませながら夢中になって取り組む姿が見られた

これ（フラフープ）の中に入れたら倒れへんで!!取れないようにガムテープでとめよう!!

考察

・　教員がポートフォリオを作成することで幼児のつぶやきや思い、友達とのやり取り等幼児の会話の様子を注意深く見たり聞いたりするようになった。
・　職員間で、一緒にポートフォリオを活用しいろいろな意見を出し合うことで、個々の幼児への理解が深まりより共通理解できた。
・　ポートフォリオを活用して保護者に幼児の興味のある遊びや普段の幼児の姿を知らせてアプローチすることで、幼稚園の取り組みを理解してもらう機会につながった。

（事例2）

「『はばたくなら』を活用して
『育てたい力』につなげよう」　4歳児10月

【内容】「お化け迷路をつくろう」

「トンネル短すぎたら，小さい組さんおもしろくないやん」の言葉から「トンネルを延ばしたらおもしろいだろうな」と教師は援助する。

幼児が楽しいと感じた場面を書く

お化け迷路作り
・おばけが出てくる場面を考えるとドキドキする。
・違うクラスの友達が来てくれることを楽しみにしている。
・友達が助けてくれるからうれしい。

子どもの姿からの見取り

・友達のことを気にかけられるようになってきた。
・「楽しさ」があるからアイデアが湧いてくるのだな。
・製作好きの幼児は、みんなに頼りにされているようである。

【幼児の育ち】

幼児の10の姿の育ち

健康な心と体	自立心	協同性	道徳性・規範意識の芽生え	社会生活との関わり
○	○	○	○	
思考力の芽生え	自然との関わり・生命尊重	数量・図形文字等への関心・感覚	言葉による伝え合い	豊かな感性と表現
○		○	○	○

考察

・　研修を進めることで教員の保育の視点が明確になり、保育の振り返りができ、どのような力が育ってきているのか、何が弱いのか等を考え『育てたい力』につなげるようになった。次にどのような保育や援助、環境構成をしていけば良いのか等も深く考えるようになった。

6　まとめと今後の課題

（1）教員が職員研修の場で、幼児の活動や幼児の姿に心を留め自分の気付きや思いを出し合うことで、多面的に様々な幼児の育ちが見えるようになった。園長として子どもを見る目、保育を見る目、保育者を見る目すべてを固定化せず、肯定的に理解することを大切にする必要がある。

（2）子どもが「楽しい」を感じる保育をするためには、教員も子どもと共に「楽しい」を感じることが大切である。そのためには、日々の遊びの中で幼児の姿をしっかり捉え、「おもしろい」「不思議だな」の思いを感じ取り、受け止めるなどの見取りを大切にする必要がある。

（3）幼児の姿や保育を記録し可視化して、複数の教員で保育の振り返りをすることで『幼児の育つ姿』を見取る力を育てることができた。

（4）幼稚園の教員集団が互いに連携を取り「ワンチーム」で保育にあたり、各学年の育ちをつなぐことの大切さを実感した。園長として常に一人一人の教師が居心地よく活躍できる幼稚園経営の在り方を考え、教師が一丸となって『考える』ことを中心に『保育の質』を高めていきたい。

第３分科会　教育課程　　質の高い幼児教育の実現に向けて

自発性・主体性を育むために

和歌山県　橋本市立紀見幼稚園　教諭　髙松　華代

１　主題設定の理由

本園の園児の遊びの姿より、遊びの経験の少なさから自分から好きな遊びを見付けにくい、いろいろなことに興味はもつが遊びの楽しさが分からずに人やものと関わる前にやりたいことを諦めてしまう、遊びが次々に変わってしまい継続しにくいなど、人・もの・ことに関わって遊ぶことを充分に楽しみきれていないのではないかと感じた。

そこで、身近な環境に自ら関わっていく力の基礎となる自発性と、自ら周囲に働きかけて遊びを生み出していくために必要な主体性を育みたいと考えた。

２　研究の内容と方法

（1）仮説

遊びの姿から、自発性が表れた場面を読み取り、思いや願いに添った環境構成や援助を再構成することで、主体性が発揮される。このプロセスを繰り返し遊びの経験を積み重ねることで、自発性・主体性が育まれていくのではないかと考える。

＜自発性・主体性の捉えの共通理解＞

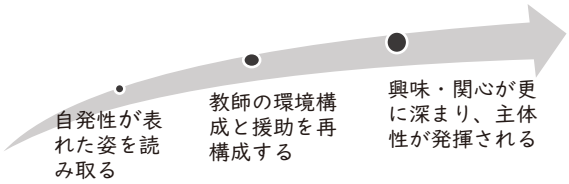
【自発性は】

幼児が本来もっているものであり、関わりたくなるような、人・もの・ことがあることにより表面に表れて育つ

【主体性は】

自発性が表れ育つことで、自ら周囲に働きかけて様々な活動を生み出し、連続性を保ちながら展開されることを通して育つ

＜自発性・主体性を育んでいくための道筋＞



〔このプロセスを繰り返し積み重ねることで、自発性・主体性が育まれる〕

（2）内容と方法

遊びの姿から、自発性の表れた姿・主体性が発揮された姿を読み取り、環境構成と教師の援助の在り方を探る。

・エピソード記述表から、
　①自発性が表れた姿を読み取り、環境構成や援助を振り返る。
　②自発性の表れから主体性の発揮へと導くための環境構成と援助の再構成を考える。
　③再構成した環境構成や援助により、主体性が発揮された姿を読み取る。

・エピソード分析表を用いて、全職員で、自発性・主体性の発揮された幼児の姿から背景や必要とされる環境構成と援助について分析し、その後の読み取りや環境構成と援助に反映していく。

３　実践事例

＜事例１＞　５歳児　７月　シャボン玉遊び

【自発性が表れた姿】

ポイを液につけたときに、薄い膜が張るとシャボン玉ができることに気付く。

「あ、そうか、こうやったらできるんだ」と膜ができるまで何度も液をつけ直す。その言葉に刺激を受けて他児も同じようにつけ直し試すことを繰り返しながら、どうしたら膜が作れるのかに気付き、持ち方や手の動かし方などを工夫するようになった。

【主体性を発揮するための環境構成と援助】

・これまでの経験から、どんな素材でシャボン玉を作ってみたいか出し合う。
・幼児から出た画用紙や材質の違う紙、牛乳パックなどの素材と、モールやうちわなど自分なりに使い方を考えられるような素材も一緒に準備する。

【主体性が発揮された場面とエピソード】

［場面］

・画用紙を丸めて筒状にし何度も液につけていると破れてきた。新しく作り直す際に、筒の長さや太さを変えたりしながらシャボン玉が作れるか試していた。何度も試しながら、失敗したことや成功したこと、気付いたことを伝え合う姿が見られた。

［エピソード］

・モールに気付いたA児が持ち手のある輪を作り、吹いてみるとたくさんのシャボン玉ができたことでうれしそうに何度も作っている。A児の姿に刺激を受けたB児は、モールを束ねる数や形を繰り返し試しながら夢中になって遊んでいた。

考察

・ 自分が試したいと思う素材を出し合うことにより、どの素材を使うとシャボン玉が作れるのかを考えたり、友達の意見を聞いて刺激され、自分なりに試してみたいという意欲をもったりすることにつながったと考える。

・ 思いや願いに添った素材や好奇心・探求心を刺激する素材を準備したことにより、何度も試したり工夫したりすることができ、失敗や成功を繰り返し、友達と経験したことを伝え合って遊ぶ姿となったと考える。

＜事例２＞　５歳児　９月　キャンプごっこ

【自発性が表れた姿】

・夏休み後、キャンプを経験した幼児の「もう一回キャンプしたい」という思いからキャンプごっこが始まった。

【主体性を発揮するための環境構成と援助】

・ 友達がキャンプごっこをしている姿を見て他の幼児も遊びに入り楽しむ姿が見られた。そこでキャンプを経験している子としていない子のイメージが共有しやすくなるのではないかと考え、絵本『はじめてのキャンプ』の読み聞かせをする。

【主体性が発揮された場面とエピソード】

［場面］

・読み聞かせ後のキャンプごっこの中で「キャンプファイヤーをしたい」、「望遠鏡で星を観るようにしたい」等、絵本の場面を取り入れて遊びたいという思いが出てきた。

・作りたい物が共通している幼児同士が集まり、思いや考えを出し合いながら遊ぶ姿が見られた。

［エピソード］

・キャンプファイヤーをしたい幼児が数人集まり、絵本に出てくるキャンプファイヤーの炎を色画用紙で作ったが思い通りに作れない。カラーポリ袋で作り直してみるが倒れてしまいどうしたらいいか分からず困っていた。

　Ｔ：「どうやったらできるのかな」

教師の言葉を聞き、近くで別の遊びをしていたA児とB児が様子を見に来た。

　A児：「火にテープを貼ったらいいんじゃない」

　B児：「もっと固くしないとだめだと思うよ」

　A児とB児が、絵本の絵を見ながら、テープの素材を選んだり貼り方を工夫したりしたことにより、上に伸びた倒れない炎ができた。炎が完成したことを、その場にいた幼児が喜んでいる様子を見て、A児とB児も笑顔になり、一緒に喜んでいる様子であった。

考察

・タイミングを見計らって読み聞かせをしたことによりキャンプのイメージが共有しやすくなり、経験がない幼児も興味・関心が膨らみ、「こんなことをしてみたい」という思いをもって遊ぶ姿になったと考える。

・教師の言葉から友達が困っている姿に気付いたA児とB児が、アイデアを出し合い、協力しながら完成することができ、友達が喜んでくれたことが、A児とB児の喜びや自信にもつながったと思われる。

4　研究の成果と課題

・エピソード記述から遊びの姿を読み取り、エピソード分析表を用いて検証をすることで、心の動きや育とうとしている姿が見え、遊びの展開を見通した環境構成や援助を再構成することができた。

・自発性の表れた姿や主体性が発揮された姿は、遊びや年齢・個々によっても異なる。そのために、教師は常に幼児の思いや願いに寄り添い、タイミングを見計らいながら環境構成や援助を見直していくことが大切であると感じた。

・思いや願いに寄り添いながら、ねらいに沿ったより適切な環境構成と援助をするために、全職員でエピソード記述による分析を繰り返し、幼児の姿を深く読み取るための力をつけていくことが今後の課題である。

・年間指導計画を期ごとに見直し、年度末に再度見直しを行った。自発性・主体性に視点を当てて１年間取り組んできたことで、遊びの育ちの姿を振り返り、矛盾点等の改善を行っていくことが幼児教育の質の向上につながると考え、来年度も引き続き行っていきたい。

第４分科会　幼小連携　　幼小の円滑な学びの接続

つなぎつながる　遊びと学び

兵庫県　相生市立平芝幼稚園　教諭　山本　倫子

１　主題設定の理由

相生市では中学校区ごとに「１２年間における目指す子ども像、生活・学習のルール」について、幼小中の教師が話し合いを行い、教師同士が連携する基盤ができた。その中で、小学校との接続において、幼児が遊びの中で気付いたことや身に付けたことが小学校以降の学習の場でどのように生きているのか明らかにしていくことが課題として挙がった。そこで、幼児の遊びの様子を小学校の教師と共に見て、読み取りを共有することが必要であると考え、本主題を設定した。

２　研究の内容と方法

○幼稚園教師が遊びの中の学びを捉え、小学校教師と共通理解を図る。
・交流活動の合同指導案を作成する。
・合同指導案の中に、学びの欄を設け、“幼児期の終わりまでに育ってほしい姿”を基に記入する。
○幼稚園教育と小学校教育の、互いの学びを理解し合う。
・子どもの事実から読み取った、子どもの学びについて話し合う。
・教師の援助や指導上の留意点を共有する。

３　実践事例

⑴　合同指導案についての取り組み

昨年までは、毎年同じような交流活動の繰り返しで、個々の製作が中心となり子ども同士の関わりがあまり見られなかった。そこで、子どもの学びがより見えるような内容にしたいと考え、小学校の教師に合同指導案を作成することを提案した。

幼稚園が枠組みを作成し、幼小共に見直したところ、小学校の指導案には、環境の構成の記述がないことが分かった。また、学びが幼稚園から小学校へつながるような書き方にした方がよいのではないかという提案も受けた。このことをきっかけにして、互いの指導案について更に考え合うことになった。幼稚園からは、環境の構成の捉え方について説明をし、共通理解しながら合同指導案の作成に取り組んだ。

⑵　～秋の自然物を使って遊ぼう～（１１月）

生活科の教科書を参考にし、グループでの活動が深まるようなコラージュづくりの活動を提案した。また、共にめあて・ねらいについて話し合い、合同指導案を作成した。

『秋見つけ～コラージュ作り・おもちゃで遊ぼう～』					
本時のめあてねらい	（幼）ねらい ①			（小）めあて ②　③	
時刻・場所	幼児・児童の活動	環境の構成	(幼・小) 学びの捉え④	(幼) 教師の援助	(小) 指導上の留意点

①秋の自然物を使って、１年生と思いを伝え合ったり、工夫したりしながら遊ぶ楽しさを味わう。
②秋の自然物を使って、５歳児と活動する中で、相手のために工夫したり、相手の喜びを実感したりすることで、人と関わる楽しさを感じ、自分自身の成長に気付く。
③諸感覚を使って、秋の身近な自然物を観察したり、集めたり遊んだりし、その楽しさに気付く。
④学びの捉え
（幼）協同性、豊かな感性と表現、言葉による伝え合い
（小）親切、思いやり、表現方法の創意工夫

５歳児と１年生が７、８人のグループに分かれ、近くの公園で活動を始めた。何を作るか話し合いをしたところ、普段からなかなか思いを伝えにくいA児は、黙って１年生の話を聞いていた。幼稚園教師が「考えたことを言っていいんだよ」と声を掛けていると、１年生が「何がいい？」と聞いてきた。「一つだけでもいいよ」と、優しく寄り添うようにA児が言うのを待っている。A児が「飛行機を作りたい」と言うと「どんな飛行機にする？」「大きいのがいいな」と２人で話しながら一緒に必要な素材を探し始めた。見付けたものを見せ合ううちに、A児も「こんな木、見付けたよ」「これもいい？」「どんぐりもあった」と、うれしそうに１年生に話しながら一緒に探していた。製作に取り掛かると、イメージを形にしにくいA児の様子を見て、１年生が「こうしたいの？」「こっち、持ってあげるね」等と、A児の思いを言葉で表したことで、一緒に製作に取り掛かることができた。

別のグループでは、１年生が「ウサギと花火をつくる人に分かれよう」「じゃあ、僕はセロテープを切っていくね」と声を掛け合ってグループ内での役割を分担し製作を始めていた。１年生のB児は、「たくさん切るの大変やな」と言いながらも、セロハンテープを根気強く切り続けて幼児に渡していた。いつもは自分の思い通りに活動を進めている５歳児のC児が、B児から受け取ったセロハンテープでどんぐりを次々と貼り付けていた。製作終了の時間がくると、できあがったものを見て「もっと花火を作りたかった」と言っていた。

後日、幼小の教師間で事後の話し合いをした。当日の子どもたちの姿から、よかった点や検討が必要な点、成長が見られた点などについて振り返りをした。

考察

幼稚園教師の読み取り

・自分の思いを表現しにくいA児は、１年生の優しい声掛けがきっかけとなり、思いを言えることができたのではないか。そして、言えたことがうれしく、自分から楽しんで次々と活動に取り組んでいったと考える。このように１年生がA児の思いをうまく言葉に置き換えながら、手伝ったり提案したりしてくれたことで、A児は思いを実現することができ、満足感を味わうことができた。この経験が、A児の自信や意欲にもつながったと捉える。(幼：言葉による伝え合い)

・幼稚園の頃は、集中力がなく製作時に長続きしなかった１年生のB児が、セロハンテープを切ることに長い時間一生懸命取り組んでいた。頼られるうれしさや、人の役に立つ喜びを感じ、根気強く取り組むことができたのではないか。また、これまでの経験が生かされ、役割分担を提案したり、最後まで役割を果たそうとする責任感が育ったりしているのではないかと考える。（小：親切、思いやり）

・いつもは、思い通りに活動を進めているC児だが、１年生にしてもらう喜びを感じたり、優しい気持ちに触れたりしたのではないかと考える。また、憧れの気持ちを抱くきっかけになり、次は自分が相手にしてあげようとする思いにつながっている。（幼：協同性）

小学校教師の読み取り

・グループ活動を行ったことで関わりが増え、５歳児に優しく接したり思いを聞いたりしていた。他者に対する思いやりやしてあげたいという気持ちが行動に表せたのではないかと感じられた。（小：親切、思いやり）

・教師の援助と指導上の留意点を事前に共有していたことで、当日、互いの関わり方の意図が見えやすくなり、子どもたちの学びの捉えをしやすくなった。

・幼稚園教師は子ども一人一人の具体的な姿から成長を捉えたが、小学校教師は、本時の活動の進め方についての反省を一番にあげていたので、学びの捉え方や評価の仕方が違うことに気付いた。

４　研究の成果と課題

・昨年までは「教わる・教える」という固定した関係の活動であった。しかし、合同指導案を作成したことにより、教師同士が共通理解して活動に取り組むことができた。

・幼児は、グループ活動のときに１年生に優しく受け入れられることで、自分の思いを出したり、やってみようとする気持ちをもてたりしていた。また、１年生も頼りにされることで、自信をつけて幼児をリードして遊びを進めようとする姿につながっていった。

・合同指導案を作成し、学びの欄を設けたことで、幼児の学びの姿を小学校教師に伝えることができた。しかし、“幼児期の終わりまでに育ってほしい姿”の１０項目で示すだけでは、幼児の遊びがどのような学びにつながっていくのかが分かりにくいことに気付いた。今後は、幼児の学びの姿を具体的に明記するなど、より分かりやすく伝える工夫をしていきたい。

・話し合いの機会を充実させたことで、教師間のつながりが深まった。また、情報交換、授業や保育を参観し合うなど、日常からできる連携を大切にしながら、普段の姿を伝え合うことに力を入れていきたい。

・小学校教師と同じ思いで子どもの姿を捉えていく道筋ができた。今後も、同じ方向に向かい取り組みを継続していくことで、幼稚園の遊びと小学校の学びのつながりを明らかにしていきたい。

第４分科会　幼小連携　　幼小の円滑な学びの接続

幼児や保護者の入学への不安や段差を和らげる取り組みを通して

～互いのよさを認め合える交流の活動を考える～

和歌山県　新宮市立丹鶴（たんかく）幼稚園　主幹教諭　松尾　れいか

今年度、新宮市立丹鶴幼稚園に異動となったが、昨年度所属していた王子幼稚園での取り組みについて報告する。

１　主題設定の理由

本園はＪＲ新宮駅を中心とした地域を含む、新宮市東南部の太平洋に近い海岸沿いに位置している。隣接する小学校とは祭りなどの育友会行事を通して地域も含めた交流を長年行っている。また、保育の上でも年間を通して各学年との交流活動も行われ、楽しい時間を共有することはできているが、相互の教育理解につなげていくことの難しさも感じていた。そこでエピソード記録やアプローチカリキュラムを作成し、教職員間の相互理解を深めることで、就学前からの学びと育ちを意識していきたいと考えた。幼児教育での活動や経験を小学校での学習につなぐことで、子どもたちが安心して学び、自信をもって過ごしていけるのではないかと考え、主題を設定した。

２　研究の内容と方法

（１）研究のねらい

同年代の友達との交流にとどまらず、小学校が併設されているメリットを生かし、それぞれの目指す幼児像、児童像を明確にし、子どもの発達や学びの連続性を組織的に行うための連携・接続の進め方と在り方を研究する。

（２）研究の方法

①　エピソード記録を活用した、日常の保育からの子どもの学びや育ちの検証

②　小学校への接続を意識したアプローチカリキュラムの作成

③　幼小の交流活動や職員研修

３　実践事例

（１）王子ヶ浜小学校１年生との交流９月２０日

《製作交流》

１年生との４回目の交流が行われ、紙コップや折り紙など使った４つのおもちゃで一緒に遊び、その後実際に製作をして遊んだ。

「空気が出やんようにテープでとめてね」その言葉を聞いたＣ君は、「空気、抜けてかんようにギューってとめる」と繰り返す。Ｃ君が「とめれん。とれた」と言うと、１年生が「テープだね。テープがあまい」という返事。その声を聞くと同じように「テープがゆるい」と繰り返し、またテープでとめはじめた。

出来上がった『紙コップを使ったお化け』を持って保育者に見せ、「手でギューってしたらしぼんでいくから、そしたら袋を紙コップに入れて・・・アイスクリームみたいだ」と何度も楽しんだ。

Ｃ君は、言葉による伝え合いや協同性は少し弱いところがあるが、１年生という頼もしい存在がいたことで、安心して取り組むことができた。また、お兄さんが話すことをまねしながら、言葉のやりとりを楽しんだり、新しい言葉や表現に関心をもったりする姿が見られた。ちょっとした取り組みの中にも、子どもの学びの姿を見取ることができた。

（２）エピソード記録から　５歳児９月

《わかった！たにしや》

生き物に関心があり、毎日小動物や生き物の様子を観察しているＤ君。Ｅ君は、今日新しく仲間入りした色とりどりのめだかにとても興味をもった様子だった。水槽の中を見ていた二人は、中の小さな生き物に気付くと、それが何かを知りたくなったようだった。

Ｄ君「うわ～、大きいのも小さいものある」「色が違うのもあるね」Ｄ君「これ、なんていう名前やろ」Ｅ君「小さい図鑑があったはず」「多分あれにのってるで」Ｄ君「そうやね」Ｅ君「これは、や」保育者「ど」Ｅ君「か、り」Ｅ君「ちがうな、次は」と言いながらページをめくり続ける。すると、Ｅ君が「あ！これやろ。た、に、し、たにしや」と探していたものと同

じ写真を図鑑から見付け、すぐにK君に伝えた。

２人は、図鑑を広げながら読めるようになってきた平仮名を一文字ずつ読み進め、諦めることなく「たにし」に辿り着くことができた。お互いが共感し合うことで自分たちなりの達成感を味わい、文字のおもしろさにも気付けたように思う。

また、身近にある水槽の生き物について、２人が積極的に関わり、予想したり、考えを巡らせたりすることを楽しんでいた。小動物を命あるものとしていたわり、大切にする気持ちをもって関わるようになっていった。

このように日々の子どもの姿から、１０の姿に見る学びを感じ取ることができた。幼稚園での遊びに見られる学びの芽生えを可視化し、どのように育っているのかを明らかにし、小学校の先生に具体的に伝えていくために教育課程のねらいとエピソード記録を月ごとにまとめ、接続カリキュラム前期を作成した。

【令和元年度　　王子幼稚園　アプローチカリキュラム】

子どもの気付きや言葉、１０の姿からの学びを記入し、それが小学校でどの教科や単元につながるのかなども考えていった。

4　研究の成果と課題

（1）成果

・遊びや学習の記録をエピソード記録にまとめることで、「学びの芽生え」や育ちが見やすくなり、共通理解がしやすくなった。

・「アプローチカリキュラム」を作成することで、育みたい資質・能力と幼児期の終わりまでに育ってほしい１０の姿がより明確化された。

（2）課題

・３年保育を行っている丹鶴幼稚園でも、各年齢の学びが小学校につなげていくように各年齢の発達段階を知り、遊びの中の学びを捉えていく。

・幼児教育と小学校教育、双方の授業や研究会などの交流を更に充実させ、共に学び合い、教育課程の編成・実施を行っていく。

・今後の幼児教育を見据え、保護者の不安を和らげるような、幼小の滑らかな接続を目指してより推進していく。

＜エピソード記録研修の様子＞

・少人数に分かれ、互いの思いや考えを出し合えるような雰囲気で研修を実施した。

＜保幼小合同研修会での様子＞

・講師に鳴門教育大学の木下光二先生をお招きし、連携・接続を深めていくための時間の確保や内容などについての理解を深めることができた。

第５分科会　特別支援教育　　集団で育ち合う特別支援教育

個の育ち　集団の育ち

～みんなで共に育ち合うために～

大阪府　富田林市立伏山台幼稚園　　教諭　小門　知江子

１　研究主題設定の理由

本園は、４歳児６名と５歳児３名の計９名で合同保育を行っている小規模園である。『こころ豊かにたくましく生きる子どもの育成』を目指し、一人一人の発達の特性を踏まえ、個に応じた適切な環境設定と支援に努めている。

また、本市では、子どもに関係した機関が継続的に一貫した支援を行うための『つながるファイル』があり、本園も保護者と共に作成したり活用したりしている。

本園では、園生活の中で子ども自身がありのままの自分を伸び伸びと表現しながら成長してほしいと願っている。そのために、まずは子どもの実態把握を行い『個の理解』『個の育ち』の充実を大切に援助していくことにした。そして『個の育ち』を『集団の育ち』へとつなげ高めていきたいと考えた。

２　研究内容と方法

① エピソードを記録し、教職員間で把握・共有して多面的に分析することで『子ども理解』を進め援助に生かす。

② 『個』と周りの子どもの関係性を見極め、分かり合い、関係が深まるように気持ちをつなぐ援助を行う。

③ 他機関と連携し、子どもの発達を見通した上で、より具体的で明確な援助の方向性を探る。

④ 言葉の意味をより具体的にイメージしたり理解したりしやすいように、イラストや写真を活用した視覚教材の研究に努める。

⑤ 保護者と共に『つながるファイル』を作成する中で幼稚園と家庭が、子どもの困り感や目標を共有し一貫した援助を行う。

３　実践事例　A児

A児について

発達の遅れも伴うことから難聴が進んでいることに気付かず、療育の開始が遅くなったという経緯があった。A児を受け入れるにあたり事前に療育施設の見学と『つながるファイル』を活用し、今までの育ちや支援方法の連携を保護者と共に行った。そこから本児の「聞こえにくさ」や「発語の少なさ」を具体的に知り、全職員で本人の気持ち理解と集団生活に参加しやすい環境づくりに努めた。

介助員は、担任や友達の言葉をA児のペースに合わせ視覚支援や手話を使って伝えたり、A児の思いを代弁したりする役割を担うことにした。また、日々の記録から行動を考察・分析し、内面理解を進めていった。そこから、全教職員で、A児への援助方法を考え実践していくＰＤＣＡのサイクルをつくった。

A児は友達と関わりたい気持ちが強く、スキンシップを求めていた。しかし、気持ちを伝える手段が少なく、自分の思うままに関わることが多かったので、手話や身振り手振りで気持ちを伝えるように繰り返し根気よく援助していくことにした。支援会議では、エピソード記録から長時間の活動に参加しにくいことが分かったので、朝の会は短時間で行うことにした。また、日課の中に会を位置付け繰り返すとともに、イラストを用い活動内容が分かりやすいようにし、まずは「参加すること」を目標にした。

さらに、名前を呼ばれることを楽しみに参加できるのではと考え、当番が全員の名前を呼ぶ場面をつくった。すると、A児はもちろん他児も、自分の名前が呼ばれることを楽しみに参加する姿が見られた。全員の名前が呼ばれることで９名の一人一人が、自分は大切なクラスの一員であることを実感でき、A児も名前を呼ばれ返事するときには満足げな表情が見て取れた。徐々に友達の名前を覚え「友達の名前を呼びたい」という思いが強くなり、繰り返し取り組む中で、自分が当番のときには友達と一緒に名前を呼ぼうとする姿も見受けられるようになった。

１２月〈お楽しみ会〉

２学期に入ると語彙数が増え二語文を発するようになった。「かして」「いれて」「ごめんなさい」「ありがとう」「ちょうだい」などの言葉の発音も幾分聞き取りやすくなったことで、友達とも言葉

を介して関わることができるようになっていった。そこで、介助員と人形を使ってごっこ遊びを楽しむ姿を友達と一緒に活動を楽しむことにつなげたいと考え、劇に取り組んだ。お楽しみ会では、サンタさんが来ることをとても楽しみにしていたことから『てぶくろ』の劇にサンタさんを登場させることにした。A児はサンタ役になり、友達とイメージを共有し一緒に活動できたことで、友達と取り組む楽しさと達成感を味わうことができた。

２月〈生活発表会～ブレーメンの音楽隊～〉

お楽しみ会では友達と表現遊びを楽しんだが、劇の創作段階では、セリフや動きが決まっていないため、見ていることが多かった。そこで、内容が決まるまでは友達の様子を見て理解する時間とした。気に入った場面に参加することが増えていったが、時にはどのように参加すればよいのか分からない思いを大道具に体当たりして倒すなどの姿で表すこともあった。そんなA児に対して「Aさんやめて。劇ができない」と困った気持ちを素直に言うクラスの子どももいた。友達に言われ、気持ちが乱れる姿から、このままでは『A児が誤解される』と考え、クラスの子どもたちとA児とつなぐためA児の気持ちを代弁することにした。

担任：「みんなも知っている通り、Aさんは聞こえにくいでしょう。どうしていいのか分かりにくいってどんな気持ちなのかな？」
B児：「嫌な気持ち？」
担任：「そうだよね。きっと嫌な気持ちだよね。だから、嫌な気持ちをみんなや先生に伝えているんだと思うよ。Aさんは、みんなのやっているのを見て〈あんなふうにやるんだ〉って分かると思うの。だから、みんなはAが見て分かるようにがんばれるかな？」
C児：「うん！できるよ」

＜生活発表会予行＞

待機場所で待ち、自分の出番になると友達と一緒に参加するようになってきた。その様子を見ていたクラスの子どもたち・・・。

B児：「A、今日はがんばったね。できてた」
担任：「先生もそう思ってたの。がんばっていたね。そう思った人は他にいる？」

（担任の言葉を聞き、全員が手を挙げる）
担任：「そう思った人は、Aさんに『がんばったね』って直接伝えるとAさんはうれしいと思うよ。でもAさんががんばれたのは、みんながAさんにいつも分かりやすいように、やさしく教えてくれたからだよ。みんなもがんばったね。先生は、とってもうれしいです」
C児：「Aさん、がんばったね。僕らもがんばったね」
（全員満足そうな表情であった）

予行で自信をもった子どもたちは、生活発表会当日も、緊張しながらも力を発揮することができた。A児の保護者は「心配していたが、参加できるように先生たちが考えてくれたことがよく分かった。Aがみんなと一緒に参加している姿を見て感動した」と感想を寄せられた。

４　成果と課題

【成果】

・日々記録したエピソードを基に教職員間で連携を密に話し合いを積み重ねたことで、課題と援助の方向性を共通理解し、役割分担をしてより効果的に援助することができた。
・A児を中心に支援を進めていったことで、記録や日々の姿から周りの子ども一人一人の課題や困り感を把握することにつながり、一人一人へ返していくことができた。「A児にとってのみんな」「みんなにとってのA児」のバランスを意識して援助し続けたことで一人一人が互いに集団への所属意識と親しみをもつようになり『個』と『集団』の育ちにつながった。

【課題】

・A児だけでなく、クラスの一人一人が自己肯定感をもてるよう『ちょうどよい課題』を設定することが必要である。
・個々の特性と発達段階、家庭環境を踏まえた『子ども理解』がとても大切である。データファイルを共有するなどを取り入れたが、限られた時間の中、教職員間で多面的に見取る援助をし続け共通認識がもてる工夫が必要である。
・就学に向けた保護者の願いと子どもの育ちをスムーズにつなげる連携が重要である。他機関との連携に『つながるファイル』を有効活用し、よりよい援助の方向性を探っていく必要がある。

第５分科会　特別支援教育　　集団で育ち合う特別支援教育

地域の園で共に育ち合う

～友達との関わりの中で～

和歌山県　海南市立巽（たつみ）幼稚園　主任　林田　麻実子

１　主題設定の理由

本園は、小学校と中学校に隣接しており、子どもたちは入園から中学校卒業まで約１２年間共に地域で育っていく。そのため関わりが密接であり、お互いに認め合う関係ができ上がっていくことで、仲間意識が強くなる傾向が見られる。

本市には、心身の発達に課題をもつ子どもに「個に応じた遊びの楽しさを経験させ、豊かに成長、発達できるよう支援すること」を目的とする児童発達支援事業所Ｓ園がある。その園に子どもを通わせる保護者の中には就学前の１年を地域の幼稚園で過ごし集団生活を経験させたいという思いがある。

そのような保護者の願いに応えるため、就学前の１年間、本園在園児と共に生活し、遊び、自分らしさも出しながら、互いに認め合える力を育むためにはどのようにすればよいか探っていきたいと考えた。

２　研究の内容と方法

（１）子どもの特性を知り、個に応じた支援の在り方を探る

（２）周りの子どもとの関わりの中で、共に育ち合う環境を工夫する

（３）職員や保護者との共通理解や保護者の気持ちに寄り添った支援の在り方を工夫する

３　実践事例　　A児

Ｓ園に通っていたA児は、言葉数が少なく、興味のあることを中心に生活し、製作等自分が苦手と感じることはあまり経験してこなかった。日常生活では興味をもったことに対しては「一番にしたい、一番になりたい」というこだわりが強く、友達と関わることよりも、教師との関わりが主となっていた。

〈転入当初〉

本園での生活では、これまでの生活リズムと異なるためか戸惑いや不安を強く感じているようであった。これまであまり興味を示さなかった製作や集団での活動では、できないと思う気持ちが強く見られ、物を投げたり、泣いたり、廊下へ逃げ出したりすることが多く、気持ちの切り替えに時間を要した。

そのため、何事においても無理強いせず、徐々に本園の生活に馴染み喜んで登園できることを第一に考えた。そこで、A児が興味を示しそうな大型積み木やブロック等を準備し、登園後からクラスでの課題活動が始まるまでの間、十分に遊べるよう、場と時間を確保した。そうすることで、A児が遊びに興味をもち、またそのようなA児の姿を気にかける友達との関わりが増えると同時に、複数でのごっこ遊び等、次第に遊びの場も広がっていった。

考察

・Ｓ園での様子を事前に引き継いだ上で、本園の教師間で具体的な関わり方について話し合った。まずは、A児が安心し落ち着いて過ごせる環境作りや支援の在り方を考え、次に情報を共有して同じ目標に向かって支援することとした。時間を要したが、A児がスムーズに園生活に馴染めるようになった。

・A児自身、穏やかな性格であったことと、周囲の友達が優しかったことから、お互いに思いを受け入れ合ったり、譲り合ったりしながら、好きな遊びを通してクラスにも溶け込みやすかったようである。

〈１学期　４～５月頃〉

A児は、はさみを使うことが苦手なため製作を特に嫌がり、見本通りにできないとはさみをその場に投げつけて、保育室から飛び出すことが多かった。その都度声かけをしたが、「いやだ」「しない」となかなか気持ちの切り替えができなかった。そこで、しばらく声かけを控え、様子を見て待つことにした。

ある日、教師がクラスの友達の作品を壁面に飾ったところ、自分の作品が無いことに気付き、自分から「作る」と伝えに来た。教師は、すかさず「A君の材料あるよ。作ってみる？」といつでも作れるように準備していた材料を出した。A児は見本を見ながら、初めて自分から作り始めた。出来上がった作品を壁面に飾るとうれしそうであった。それからは、うまく作れない場面でも怒りながらではあったが、やってみようとする意欲が見られるようになり表情も明るくなっていった。

考察

・環境の変化で不安を感じているA児に、無理に嫌

がることをさせるのではなく、A児が自主的に活動するようになるまで粘り強く待ったことで、A児自身が周りの様子に気付き、自分から「やってみようかな」と思えるようになり他のことへの意欲にもつながったと考える。

・降園時に、A児が初めて自分から製作に取り組んだことを母親に伝えると、母親は喜び表情も明るくなった。その後、園生活を送る上でA児が戸惑うことがあるときは家庭でも声掛けしてくれ、園に協力的になり、常に情報交換しながら関わっていくことができた。

〈２学期　１０月〉

クラスの子どもたちは全体的に競争心が少なく、ゲーム遊び等で負けても悔しさを表に出す子が少なかった。運動会のリレーの練習のとき、A児は「一番になりたい」というこだわりが強かった。教師が「バトンを次の子に渡すまで頑張って走ろうね。お友達が待っているからね」と毎回伝え励ますが“自分が走る順番のときに一番に受け取り、次の子に一番で渡したい”という思いが実現しないとその場にバトンを投げつけて泣いたり、バトンを持ったままコースから離れて行ったりした。それでも、周りの子どもたちは「楽しかった。またしたい」と特にA児への不満は言わなかった。A児に対する子どもたちの優しさはうれしかったが、同時に集団内での自分本意を見過ごさない力も育てなければならないと考え､振り返りの場で思いを引き出すために｢待つ｣指導に徹した。

子どもたちの中から「リレー最後まで、できないね」という声が上がった。そこで教師は、いつもの振り返りよりもじっくりと話し合えるように、場を保育室に移し、リレーについてクラス全体に問いかけた。A児も離れた場ではあるが、みんなの話を聞いている様子が伺えた。良い案はすぐには出ず、どうすれば最後までバトンがつながるか、A児の気持ちを受け止めながら、話し合いをする日が続いた。

しかし、予行演習でも最後までバトンがつながらなかった。話し合いで「A君は一番にバトンほしいんよな」という話が出たことから、走るのが一番速い子が「僕がA君に一番にバトンを届けるわ」と言い出した。周りの子もその意見に賛成した。教師がA児に「一番に届けられるように頑張るって言ってくれているよ。A君も頑張れる？」と問いかけると、ニコッと笑って頷いた。自分のために友達が頑張ってくれるということを感じ取ったようであった。

運動会当日、作戦通りA児は一番にバトンを受け取ることができ、最後までバトンはつながり盛り上がった。

考察

・A児はできない、苦手と感じる集団遊びに参加せず、教師の誘いかけが必要であったが、リレーの取り組みをきっかけに話し合いの場でも輪に入ろうとする様子が見られた。周りの友達に関心をもち、一緒にしたいという思いをもつようになった。
・転入当初から、周りの友達がA児を優しく受け入れてきたことから、周りの子が「どうすればA児も一緒に最後まで頑張ることができるのか。何か良い方法はないか」と考えようとする姿につながった。そのため、自分のことだけではなく、友達のためにできることを考えさせる機会になった。
・今までは競争心が見られないクラスであったが、A児の一番になりたいという思いが、周りの子どもたちにも良い刺激となり「諦めずに最後まで一生懸命頑張ろう」という気持ちにさせた。
・今後もA児自身の気持ちを読み取り、タイミングを逃さず関わり、A児自身の言葉で伝えられるようにする支援が必要であると考える。

〈小学校入学後〉

小学校への引き継ぎでは、園の子どもの様子を詳細に伝え、引き続き支援してもらえるよう、より丁寧な引き継ぎの時間をもった。入学当初は、慣れない環境のために困ったり、泣いたりする姿が見られたが、幼稚園からの友達の存在が支えとなり、スムーズに小学校生活に入ることができた。また、他園から入学してきた児童も本園出身の子の関わりを見て、A児を助けてくれるようになった。そういうクラスの雰囲気や小学校職員の配慮がA児の心の安定につながり、次第にA児自身も落ち着いてきた。

4　研究の成果と課題

・A児は不安な気持ちが安定したことで、周りの友達の姿に目が向き、徐々に意欲が見られるようになった。そのタイミングを教師が待つことで、無理なく取り組めることが増えていった。
・就学までの１年間を地域の園で過ごす中で、教師との関わりだけでは得られない、子ども同士の関わりの中で生まれる育ちがある。その場面を教師がしっかり捉えクラス全体で話し合える場を整えることで、支援の必要な子だけではなく周りの友達の成長にもつながることが分かった。
・今後も職員間や保護者との連携を密にし、小学校入学後も継続して支援していきたい。

第６分科会　園経営　　次世代につなぐ園経営

「主体的・対話的で深い学び」を通してよく考える子どもを育てる指導の工夫

～幼児期から児童期への学びの接続を図るために～

東京都　品川区立二葉幼稚園　園長　山﨑　紀子

１　主題設定の理由

品川区には区立幼稚園が９園、そのうち６園が幼保一体施設である。また、区立幼稚園全園で預かり保育を実施している。

本園は品川区立二葉つぼみ保育園（０歳児～３歳児）７８名、品川区立二葉幼稚園（４歳児、５歳児）１３４名の２１２名の園児が在籍する「年齢区分型幼保一体施設」である。併設して義務教育学校豊葉の杜学園があり、児童・生徒と園児、教職員同士が年間を通じて様々な交流活動を行っている。本園に勤務する保育者は、学級担任の４分の３が経験年数３年以下で、若手の保育者の多い組織であり、保育者の育成と保育の質の向上が求められている。

今回、「幼児期の教育の見方・考え方」や幼稚園教育要領改訂の基本方針にもある「小学校教育との円滑な接続」等、幼児教育の方向性を受け止めるとともに、本園の幼児の実態を捉え、育てたい方向性を話し合った。その中で「心が動くものとの出会いを大切にしたい」「考えたり予測したりすることを楽しんでほしい」「よく考える子どもを育てたい」という保育者の願いが出された。保育者同士が学び合い、保育者が試行錯誤しながら幼児期から児童期への学びをつなぎ、保育の質と保育者の資質の向上を図るために、本主題を設定した。

２　研究の内容と方法

【研究の内容】

＜「よく考える姿」のプロセスを捉え、発達の特徴を表す＞＜「主体的・対話的で深い学び」を実現する指導の工夫を考える＞＜幼児期から児童期への接続の取り組みを実践する＞以上３点に取り組むことを通して、保育の質を高め、保育者の資質の向上を図る。

【研究の方法】

（１）遊びの質を支え同僚性を高める工夫
　・遊び展開シートを作成、活用した協議

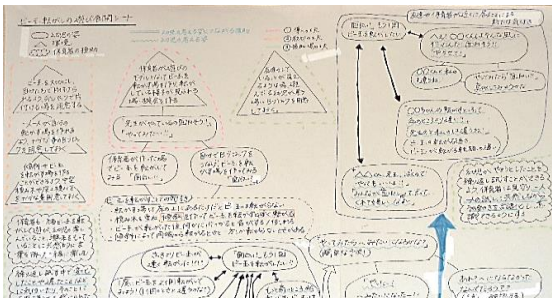
（２）保育者が主体的に幼児の「よく考える姿」を捉え指導の工夫を考える取り組み
　・保育の場面の記録から事例を通した検討

（３）全員参加の研究にするための仕組み作り
　・ブレーンストーミングで考えを出し合い、ＫＪ法でグループ化してまとめる

（４）幼児期から児童期へ学びをつなぐ取り組み
　①　保・幼・小合同研修会
　②　ティームで行う授業

３　実践事例

（１）遊びの質を支え同僚性を高めるための工夫
＜遊び展開シート（抜粋）＞



日々展開される遊びをどのように捉え援助するか、幼児が楽しむであろう遊びの「遊び展開シート」を作成し、遊びの理解、幼児理解、保育者の援助や環境構成をあらかじめ保育者同士で共有し、遊びの質を支える取り組みを行った。

考察

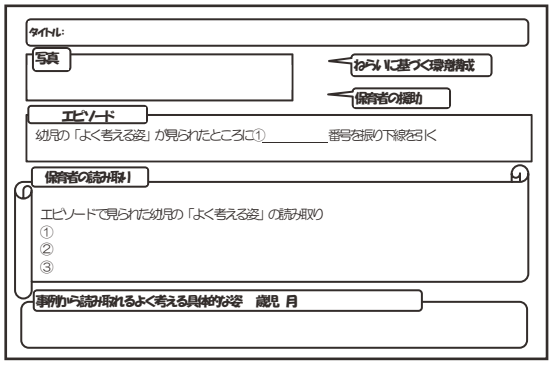
・保育者が遊びを提示したり、環境を用意したりするときに「この遊びの面白さは何か」「幼児はどこに心を動かされるのか」を遊び展開シートを基に、多様な方法やアイデアを出し合うことで、保育者が深い思索と多様な手だてを予測して幼児と遊びを楽しむことができ、新規採用教諭の学級でも幼児の「よく考える姿」が様々な遊びの場面で見られた。遊びの質を支え、幼児の「主体的・対話的で深い学び」を実現することにつながった。

・遊び展開シートで可視化することで、より分かりやすく共有化しやすいため、協議しやすく同僚性が高まった。

（2）保育者が主体的に幼児のよく考える姿を捉え指導の工夫を考える取り組み

０歳児から５歳児までの担任が毎月事例をとり、分析・考察を重ねた。

事例のフォーマット１



グループに分かれ、事例を幼児の「よく考える姿」や保育者の援助について協議した。積み重ねた事例は２００事例を超え、これらの事例を更に下記の図のように表し分析・考察した。

事例のフォーマット２

考察

・自分の事例が生かされ、参加者と幼児の「よく考える姿」を共有することで保育者の主体的な取り組みにつながった。

・事例を分析の視点から読み解き再構成して表すことで、遊びの中の幼児の「よく考える姿」を共通理解でき、保育者が指導の工夫をよく考えるようになった。

（1）　全員参加の研究にするための仕組み作り

長時間保育の中で保育者が全員参加するためにブレーンストーミングで意見を出し、ＫＪ法でまとめた。

①　研究保育では、グループで遊びの場面を記録し、協議会に参加できない保育者はあらかじめ付箋に幼児の姿、保育者の援助、読み取り等記録し、グループ協議に反映し、結論を模造紙等に表し共有する。

②　土曜日行事の終了後、ランチミーティングを行い、事例の分析・考察を行う。

考察

・全員が参加できる機会を作り、導き出した結論を共有することで共通理解が深まり、意識が高まった。

（2）　幼児期から児童期へ学びをつなぐ取り組み

①　幼・小合同研修会

保・幼・小の教職員が授業や保育を見たり、ビデオカンファレンスをしたりした。

②　ティームで行う授業の取り組み

５歳児と３年生が行う交流活動では、両学年の担任が互いのねらいを共有し進めた。

考察

・幼児理解・児童理解を深め、幼児の発達を就学につなげたり、就学後の児童の発達を理解したりして、幼児期から児童期へ学びをつなぐ取り組みとなった。

・保育者は３年生を対象にして授業を進めることで児童理解を深め、３年生の担任が５歳児を対象に授業をすることで、教員が幼児期における教育の理解を深めることができた。

4　研究の成果と課題

・事前に遊びの展開や幼児の姿を予測し、環境や援助を遊び展開シートに表し遊びの理解、幼児理解を深めることで、より具体的に援助や環境構成を考えることができ、保育の質の向上につながった。また、可視化して共有することで保育者同士が学び合い、同僚性が高まった。以上のことが「主体的・対話的で深い学び」を実現する指導の工夫につながった。

・一人一人の事例をグループで分析・考察し、幼児のよく考える姿の発達のプロセスを探ることで、幼児をより深く理解するようになり、保育者としての資質の向上が見られている。

・幼児の「よく考える姿」の発達のプロセスを表すことで、児童期の教科とのつながりが見えてきた。今後は、接続期のカリキュラムを作成する仕組み作りをし、接続期の学びをつなぐ工夫を深め、よりよい園経営に取り組んでいく。

第６分科会　園経営　　次世代へつなぐ園経営

つながり合い、伝え合い、高め合える関係づくり

～地域と共にある幼稚園を目指して～

和歌山県　田辺市立上秋津（かみあきづ）幼稚園　園長　阪本　佐和美

１　主題設定の理由

当園は、田辺市のシンボル高尾山のふもとにあり熊野早駈道沿いに所在する２年保育の幼稚園である。辺り一帯には梅やミカンの農村地帯が広がる。

新旧住民の混在化が進む上秋津は、町内のあらゆる団体で組織されている「秋津野塾」やグリーンツーリズム体験施設「あきつのガルテン」を立ち上げるなど、街づくりに熱心な地域である。

地域との交流については、以前より受け継がれている活動の他、平成２３年度に始まった民生児童委員の方々との「絵本タイム支援」での関わりをきっかけに、菜園活動や安心ネットワーク活動など地域との交流の接点が広がってきた。また、平成２８年度から指定を受けて３年間取り組んだ上秋津地域共育コミュニティ事業では、幼小中がそれぞれに実践していた「地域学習活動」について、お互いに「１１年間の育ち」を意識して取り組むことができた。この取り組みを通して、地域の方々の「農業への理解と上秋津を担う人材育成」という願いを強く感じ、幼稚園や学校だけが子どもを育てる場ではないことや、地域と共に、地域の子どもを育成することの大切さに気付かされた。

しかし、地域との交流の年数を重ねると、幼稚園側だけでは見直しにくいこともあって、今までしてきたから今年も例年通り行うといった慣例的になってしまっている行事もある。そこで、今までの関係性を土台として、地域の願いも踏まえながら、幼稚園側も育てたい教育観や園児減少などの現状を伝えるなど話し合いを通して、双方が同じ目標で取り組むことができれば、実態に即した交流が再構築されていくのではないかと考えた。

２　研究の内容と方法

○従来の地域との交流計画を実態に即した保育環境として見直すことで、地域力の活用につなげる。
○双方の願いを理解し合うことで継続可能な互恵性のあるつながりを目指す。

（１）地域とのつながり方を考える
　①環境の見直し
　②地域行事への参加
　③地域施設との交流
　④ＰＴＡ行事
（２）地域への発信の方法を考える
（３）教師間の意識を高める

３　実践事例

（１）地域とのつながり方を考える。

①環境の見直し～ミカン畑の事例から

幼稚園の前にはミカンの畑が広がっているが、普段は、持ち主の姿も見かけず「入ってはいけません」という約束を園児たちと交わしていた。昨年、袋掛けをしている場面に遭遇し、畑の持ち主に見せてほしいと頼んだことをきっかけに、畑との距離がぐっと近付いた。５月は花の香りに園全体が包まれる。日毎にミカンの実が大きくなっていくことを感じることができる。ミカンの種類の違いなど発見も多くあり、もっと調べたくなる。このような園児たちの様子を持ち主に伝えていくことにより、ますます、親近感が増し、園児たちも職員も、畑に人がいると気軽にミカン談話ができる関係になってきた。袋掛けや収穫をしたいという園児の思いにも応え、日程を合わせてくれる程になった。

考察　意識の問題ではあるが、関わり合うことの大切さを改めて感じた。今までは、景色であった畑が大切な教育環境となった。地元の特産品であるミカンへの関心も深まり、ミカン畑を大切に思う気持ちも育っている。

②地域行事への参加～「夏まつり」の事例から

町内会行事である夏まつりは、小学校中学年と町内会の高尾音頭、幼稚園だけのドラえもん音頭との２部制であった。園児だけでは、櫓を一回りできないという人数不足を校区内の会議で打ち明けたところ、公民館長から「高尾音頭を園児も踊ることにしてはどうか。できれば、幼小中そして町内会全体で高尾音頭を踊る夏まつりにしてほしい」との提案が出された。この夏まつりは、もともと地域の「高尾音頭」を復活させようという町おこし活動の一つでもあった。ただ、経験の浅い教師は踊りを知らないので、老人会の方に相談し、踊りを見せてもらうことにすると、園児たちも一緒に喜んで踊り始めた。小学校では、低学年を幼稚園の部の応援として参加することにしてくれた。今まで参加がなかった中学生も町内会の部で一緒に踊るこ

とになり、一気に「高尾音頭」を地域全体で盛り上げていく機運が生まれた。園児も地域一体感の中での盆踊りを体験し、地域への愛着心を感じることができた。

考察　園児には高尾音頭は難しいという思い込みがあったが、地元で暮らす園児たちにとっては、聞きなれた曲であり、小学生が踊る憧れの踊りでもあった。地域に相談することで、新たな発想が広がり協力が得られるのだと感じられた。

③施設との交流の在り方～老人施設の事例から

老人施設「あきつの」の運営委員となったことで、入所者の方たちが幼児の訪問の後に、表情が明るくなり元気になることや交流を増やしたいとの希望があることを知る。幼稚園では、園児数が減って、ごっこ遊びのやり取りの物足りなさを感じていることもあり、夜店屋さんごっこの開店日に一度交流することを計画した。園児たちは、ごっこ遊びでのふれあいが楽しくて、次からも「おばあちゃんたちも招待したい」という気持ちが自然に生まれ、その後も、気軽に誘い合える関係を築くことができた。

考察　最初に、どのような関わり方をしたいのかを話し合えたことで、互恵性のある日常的な交流ができたと考える。また、絵本タイム支援の方々を施設の方と一緒に招待する機会があり、地域の方同士が幼稚園を介してつながる意義も感じた。

④ＰＴＡ行事～餅つきの事例から

保護者の世帯数が減り、ＰＴＡ主催の餅つき行事は、人手が掛りすぎることから、ここ数年の検討課題になっていた。この実情を知っている幼稚園ＰＴＡのＯＢたちが、小学校ＰＴＡ行事の課題と重ね合わせて、合同の餅つき計画を持ち掛けてくれた。相談が進むうちに、中学生も地域も一緒に楽しむ案へと発展していったが、ここで、従来の幼稚園の餅つきのねらいとかけ離れたものにならないように、さらに再検討が行われ、園児も保護者も主役になれるような幼稚園用のブースが設けられることになった。

考察　修了したから終わりではない。保護者との関係が継続していくことの大切さを感じた。規模が盛大になると、つい、進行に気を取られ、一人一人の育ちを見失いがちになる。幼稚園にとって「何のために」かをしっかり見極めながら進める大切さを感じた。

（２）地域への発信の方法を考える

保護者には、毎日の送迎時に、その日の様子を遊びの中の学びを意識したコメントをつけて報告したり、各保育室では、ドキュメンテーションを展示して保育内容を知らせたりしている。念願の幼稚園のホームページもできた。お陰で、園の取り組みを保護者は理解し、全面的に支持してくれている。そこで今度は、一般の地域の方々にも知ってもらうための手だてを探った。

①幼稚園の教育内容を伝える取り組みから

校区協議会では、各学校の教育方針を説明する機会がある。今までも聞いてくれているように見えたが、保護者から、専門用語は難しいので、理解してもらえていないのではとの指摘があった。そこで、写真や図を用いたり、分かりやすい言葉を選んだりして、具体例を示しながら、幼稚園の遊びの中の学びの大切さや、「１０の姿」を通して就学後の教育につながっていることなども伝える工夫をしている。他にも、未就園児保育などの案内を公民館便りに掲載したり、各学校の毎月の活動の便りを掲示した「上秋津ファミリー」のコーナーを幼小中公民館で設けたりしている。

（３）教師間の意識を高める

地域の交流活動計画について、ＰＤＣＡサイクルを常に意識し、教職員全員で振り返りを行いながら、来年度の計画に生かすことにした。また、日々の交流の中で、コーディネーター役の民生児童委員の方や各交流相手とは、打ち合わせの段階から、園長だけでなく教職員も可能な限り参画することにした。地域の方々の思いを生で聞き、実感することが、モチベーションにつながっている。

４　研究の成果と今後の課題

（１）取り組みの成果

つながりの意味を意識して話し合うことで、より実態に合った実践となり、自然な形で地域密着型の交流ができた。今まで、個別に「老人会と幼稚園」、「公民館と幼稚園」といった点と点のつながりで関係を続けてきたが、園を核とした関わり方により、交流の輪が広がる可能性を感じた。

（２）今後への課題

交流の中では、「幼稚園」の学びの大切さを理解して受け入れてくれる地域の地盤づくりが今後も課題になると感じた。教職員の資質向上があってこそ教育的価値のある交流ができるし、地域への発信にも意味が出てくる。園内研修の充実改善を常に目指す必要を強く感じている。